



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ハンナ・アーレントのロシア革命論：思想の「失われた環」をつなぐ
Author(s)	新木, 隆太
Citation	北大法政ジャーナル, 25, 1-32
Issue Date	2018-12-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72109
Type	departmental bulletin paper
File Information	HokudaiHouseiJournal_No25-1.pdf



ハンナ・アーレントのロシア革命論

—思想の「失われた環」をつなぐ—

あら き りゅう た
新 木 隆 太

目 次

序論	3
第1章 全体主義論からロシア革命論へ	4
第1節 アーレントのスターリン全体主義論	4
(1) 全体主義運動	4
(2) 全体主義体制	5
(3) 「イデオロギーとテロル」(1953年)	7
第2節 アーレントのカール・マルクス論	7
(1) 「労働が人間を創造する」	9
(2) マルクスのフォイエルバッハに関する第11テーゼ	10
(3) 「暴力は歴史の助産師である」	10
第3節 アーレントのロシア革命論	11
(1) 全体主義論、マルクス研究からの発展としてのロシア革命論	11
(2) フランス革命の過程の模倣としてのロシア革命論	13
(3) 評議会制と議会、政府との闘争としてのロシア革命論	14
第2章 アーレントとローザ・ルクセンブルク	16
第1節 ルクセンブルクの自発的革命論	17
(1) 1900年代初頭のルクセンブルクの大衆ストライキ論	17
(2) 党組織論をめぐるレーニンとルクセンブルクの1904年の論争	18
(3) 1917年の二月革命以後の小論	21
(4) 『ロシア革命論』獄中草稿(1918年)	22
第2節 アーレントのルクセンブルク受容	24
(1) アーレントとルクセンブルク	24
(2) アーレントのルクセンブルク受容	24
結び	26

序論

先行研究

ハンナ・アーレント (Hannah Arendt 1906-1975) の政治に関する主要な著作は、『全体主義の起原』(1951/1958年。略記OT)、『人間の条件』(1958年。略記HC)、『革命について』(1963/1965年。略記OR)である。それらの著作の内容はそれぞれ、全体主義成立についての歴史記述、古代ギリシアに遡る政治理解、革命の比較史的考察である。

ところで、全体主義についての歴史的考察は、人間の条件の政治理解にどのようにつながっているのか。彼女のどのような問題意識が、彼女に革命論を論じさせたのか。言い換えるならば、アーレントの諸著作の間の「失われた環」をつなぐものは何であろうか。

アーレントの著作同士をつなごうとする試みは、いくつかなされてきた。M・カノヴァンはアーレントの思想に一貫した問題意識を、「全体主義との対決」に見出した (Canovan 1992)。森川輝一は、アーレントの博士論文にまで遡りつつ、『全体主義の起原』の初版と1958年版の異同を検討し、その思想の発展を明らかにした (森川2010)。また、2005年にはJ・コーンの編集により、アーレントの「政治入門」の草稿が編集され、英語で出版された (『政治の約束』。略記POP)。川崎修はこの書について「『全体主義の起原』と『人間の条件』というアレントの二つの主著の間の関係、その問題関心の推移と連続性をよく示している」と述べている (川崎2010b: p. 292)。そうした諸研究を踏まえて本稿は、アーレントの諸著作の間の「失われた環」をつなぐものとして、彼女のロシア革命論を構成する¹。

『革命について』の中心的なテーマはアメリカ革命とフランス革命の比較史的な考察であり、この主題については優れた先行研究がある²。それに対しアーレントのロシア革命論については、彼女自身がまとめた形では論じておらず、それゆえにこれまであまり注目されてもこなかった。川

崎修は『革命について』邦訳への解説において、彼女のフランス革命についての否定的な評価はマルクス主義とロシア革命への批判としての性格を有していると指摘し、この本が持つ当時における「挑発性」、反時代性を指摘した (川崎2010b: pp.268ff.)。しかし川崎も彼女のロシア革命論それ自体に踏み込んだ考察までは行っていない。

本稿のねらい

本稿はアーレントのロシア革命論について論じる。彼女がその著作を通して立ち向かったのは20世紀の怪物、「全体主義」であった (Canovan 1992)。全体主義、つまりナチズムとスターリニズムという同時代の経験、それを理解し、解明し、批判する試みこそが、『全体主義の起原』(初版1951年)以来、彼女の一連の著作に通底するテーマなのである。またそうした全体主義への理解と批判の試みと連続して、彼女はそれに対する代案、解決策を模索し続けた。『人間の条件』における活動・仕事・労働の区別や、『革命について』における評議会制論などは、全体主義という絶望的な時代経験との対決の試みから結実した彼女の政治理論であるといえる。

本稿では、彼女の全体主義論やカール・マルクス研究との関連の中でロシア革命論を捉えることで、ソヴィエト・ロシアの全体主義に対する彼女の理解と対決の諸相を明らかにしたい。また、そうした全体主義への理解と対決の試みは、評議会制論という、彼女の積極的な政治理論と関連していよう。本論文の後半では、ローザ・ルクセンブルクを思想を検討することで、そうした評議会制論の由来を明らかにしたい。このようにアーレントのロシア革命論を構成することで、彼女の諸著作の間の「失われた環」をつなぐことができると考える。

本稿の構成

構成は以下の通りである。第1章では、全体主義批判、マルクス主義批判、フランス革命批判と連続したものとして、彼女のロシア革命論を構

成する。アーレントはロシア革命を「必然性に従属して失敗してしまったフランス革命の継承者」として論じている。こうしたロシア革命理解は、1951年に初版が出版された『全体主義の起原』以来のスターリン全体主義の考察、その出版後すぐに着手されたカール・マルクス研究から出てきたものであるといえる。つまり、スターリン全体主義の起原を理解する試みのなかで行われたマルクス主義への批判が、『革命について』においてフランス革命にも適用され、批判がなされる。さらにそのフランス革命の過程を模倣したものとしてロシア革命が批判されるのである。

第2章では、アーレントの評議会制論について検討する。アーレントは「自発的な (spontaneous)」評議会という政治理論を、ローザ・ルクセンブルクの自発的革命論から得ていると考えられる。レーニンとの対比からルクセンブルクの思想の一端を明らかにし、それを踏まえてアーレントのルクセンブルク受容について考察を行う。

第1章 全体主義論、マルクス論からロシア革命論へ

執筆の経緯

アーレントは1951年に『全体主義の起原』初版を出版した。この本は「反ユダヤ主義」「帝国主義」「全体主義」の三部から構成された。そこで試みられたのは、ナチ・ドイツとスターリン政権下のソヴィエト・ロシアを全体主義として括り、それらが現れた起原・要素を明らかにすることであった。その出版のすぐ後、彼女はの中で検討が不十分であったスターリン全体主義の起原・要素を明らかにするために、カール・マルクスの思想と西欧政治思想の伝統についての研究に着手した。この研究は結局完成されなかったが、のちに見るように彼女の以後の著作に大きな影響を与えることとなった。1953年にはアーレントは「イデオロギーとテロル」を執筆した。ここにはマルクス研究の中で得られた洞察が示されている。この論文は1955年出版の『全体主義の起原』ドイツ語

版、1958年出版の英語版第2版に所収された。そして1958年には、古代ギリシアにまで遡って人間の活動力 (activity) を検討した『人間の条件』を出版した。1963年には『革命について』を出版した。

本章では、60年代前半に出版された『革命について』、特にその中で書かれたロシア革命論を、アーレントのソヴィエト・ロシアへの一貫した問題関心、そして1950年代前半のマルクス研究以後の彼女の概念分析の中で理解することを試みる³。

第1節 アーレントのスターリン全体主義論

本節では、第2版以降の『全体主義の起原』における、アーレントのスターリン全体主義理解について検討する。彼女は『全体主義の起原』第3部において、全体主義をその発展過程の段階と権力掌握後、つまり運動と支配・体制の二段階に区別している。

(1) 全体主義運動

大衆の創出

アーレントによると、全体主義は大衆運動であり、全体主義が発達するには大衆社会が必要である。ドイツやフランスを中心としたヨーロッパ諸国においては、19世紀を象徴する階級社会が次第に崩壊し、20世紀においては大衆社会が登場した (OT: pp. 315ff.)。大衆社会の人々は、自己中心的であり、かつ自分がいつでもどこでも取り替えが効くという感情を抱いており、他人とつながる共同の世界を失っているとともに、階級などの自らの拠りどころも喪失している。また彼らは常識や日常から逃れるため、抽象的な観念に激しく傾倒することがあるとされる。

ナチ・ドイツの全体主義がこの大衆社会を基盤として発達したのに対し、ロシアにおいてはそうした大衆社会が存在していなかった。ロシアに存在したのは、1917年二月革命での中央集権的で官僚制的なツァーリ体制崩壊後に現れた、いかなる政治組織や社会組織も残されていない無構造な社会であった。レーニンには、そうしたロシア社会

のアナーキーに対して啓蒙専制的な手段によって構造化を与えることが必要であるように思われた。彼は権力掌握後、一党独裁によって、土地を持った農民の創出、労働組合の擁護、ネップ政策による中間層の保護・育成、民族間の差異の確立といったように、社会的、職業的、民族的差異の強化・制度化を行った (OT: 28ff, 318ff)。

レーニンの死後、方向を一転させたのがスターリンであった。彼は全体主義的な独裁のために少数民族を肅正し、既に無力であったが各民族の代表機関として一応機能していたソヴィエト制度を破壊し、クラークや中間層、農民を肅正し、さらにかつて肅正に協力した階級を肅正した。これにより彼は、アトム化した大衆を人為的に作り出していったのである (OT: 320ff)。

プロパガンダ

ソヴィエト・ロシアにおいてこの大衆の創出に伴って行われたのが、全体主義的プロパガンダによる大衆の獲得であった。プロパガンダは外国に対する宣伝や大衆の獲得のように、全体主義運動の外部に対して向けられるものである。またこのプロパガンダは、現実世界の経験から一つの経験を切り離し、これを可能な限り理論的に一般化する。ポリシェヴィキの全体主義的プロパガンダの一貫した論証とそれによって現れてくる虚構の世界は、世界に根を持たず、常識や日常に不信を抱いてそこから逃れようとする大衆の願望に対応するものであった (OT: 352ff)。

全体主義的組織

この全体主義的プロパガンダがその運動の途上において目指すのが、大衆の組織化である。逆に言えば、外部に対する交渉や宣伝であるプロパガンダは、大衆を全体主義的に組織化し終えるとその姿を消す。全体主義的組織の任務は、虚構の世界を現実とし、人々をその世界の法則に従って行動させるようにすることである。この全体主義運動内部では、精鋭組織 (elite)、一般党员 (party member)、シンパサイザー (sympathizer) などが

らなる多層構造が、前衛組織 (front organization) という特有の機能を生み出した (OT: 364)。例えば党员にとってシンパサイザーの組織は、前面 (façade) として二重の機能を果たす。つまり党员は、シンパサイザーという前面によって外界から隔離されると同時に、外界と結ばれているのである。そして全体主義的組織の内部では、この前面の二重の機能が全ての層において繰り返し現れているのである (OT: 367ff)。

全体主義運動の中で指導者 (Leader) は、運動の全ての層に現れているこのような外部から運動を守る壁と外部と運動を結びつける橋という二重の機能を人格化するとされる。この任務は、指導者と彼が任命した幹部が全面的に一体化し、指導者が全面的な責任を一身に引き受けることによって果たされる。このような組織の内部では、メンバーの何らかの失敗は指導者の可謬性を示すことになるため、その失敗を修正しようとすれば、指導者はその失敗した者を抹殺するほかない。例えばスターリンは、自らの行為を取り消したくなった場合のために、予め抹殺対象のリストを用意しておき、後で必要に応じていつでも始末できるようにしていたという (OT: 374ff)。

(2) 全体主義体制

以上がアーレントが論じる運動、発展段階における全体主義の性質であるが、全体主義が一国において権力を掌握して支配を行う際には、これとは異なった性質が現れるという。なぜなら、全体主義運動が権力を掌握することには、国内で国家機構と暴力の装置を占有するという利点があると同時に、一国内における安定化や硬直化が起こり、全体主義的世界の虚構が崩れ去る危険を伴うからである (OT: pp. 389ff)。アーレントによると、この困難に対する全体主義による解決が特有の国家機構と秘密警察、強制収容所である。

「無構造化」

まず全体主義政府の国家機構には、それ特有の「無構造化 (shapelessness)」が現れるという

(OT: p. 395)。憲法は完全に無視されるにもかかわらず廃止されることのないまま残される。さらに、ボリシェヴィキの党機構がソヴィエトに対して行ったように、機関の二重化 (duplication of offices) が行われる。スターリンは、ソヴィエトの背後に中央委員会や政治局を潜ませてソヴィエトを無力化しながら、それを廃止せずに外に対する前面としてそれを利用した。

しかし、この二重化だけでは全体主義政府に特有の「無構造化」の説明には不十分である。真にその「無構造化」を作り出すのは機関の増殖 (multiplication) である (OT: pp. 399ff.)。スターリンはこれを管理機構の新設と肅正によって行った。また彼は、ソヴィエト機構、党機構、NKVD (内務人民委員部) 機構それぞれに独立の経済省、政治部、教育文化省、軍事部その他設置することによっても行った (OT: pp. 402ff.)。こうした無構造化は、全体主義が一国を支配するようになっても運動 (movement) を継続していることを示している。

秘密警察とテロル

次に、全体主義国内において虚構を実現する秘密警察 (secret police) とそれによるテロルについて検討する。このテロル (terror) は二つの段階をとる。まず初期段階においては、隠れた敵 (secret enemy) やかつての反対者 (former opponent) に対してテロルが行われる。アーレントはこの段階のテロルは他のあらゆる独裁 (dictator) のそれと異なることなく、全体主義的であるとは言えないとする。

全体主義特有のテロルと真の秘密警察支配が現れるのは、国内において反対派が存在しなくなつてからであるとアーレントは言う。ナチ・ドイツでは1935年頃、ソヴィエト・ロシアでは1930年頃に反対派に対する肅正が完了したが、それによってテロルが止んだのではなく、むしろ「客観的な敵 (objective enemies)」に対してテロルが行われるようになった。

アーレントによると、「客観的な敵」という概

念に基づくテロルは、イデオロギーにより規定された敵に対するものよりも長い期間にわたって行われ得るという。なぜなら、例えば“ブルジョアジー”のように、イデオロギーに規定された敵は条件の変化や状況の進展により消滅することが考えられるのに対して、「客観的な敵」はそれが誰であるのか、全体主義体制が続く限りその時々によって変わり続けるからである。このことは全体主義体制が運動であることと対応している。ソヴィエト・ロシアにおいては、まずはかつての支配階級の子孫が、1930年代前半においてはクラークが、1936年から1938年にかけてはポーランド系ロシア人が、戦争中はクリミア・タタール人とヴォルガ・ドイツ人が、戦争後には戦争捕虜と西方に駐在した赤軍部隊が、ユダヤ人国家の建設後にはロシアに住むユダヤ人が対象となった (OT: pp. 424ff.)。

強制収容所

全体主義体制は「すべては可能である (everything is possible)」ことを証明することや、複数性 (plurality) をもつが故にそれぞれ異なっているはずの人間を、一人の人間であるかのように組織することを目指す。そしてこの人間に対する全体的な支配の実験がなされるのが強制収容所 (concentration camp) である (OT: p. 438)。

強制収容所は、外の世界からは経済的に非合理的で、非現実的な、狂ったものであると見えるが、個々の人間を全体主義体制に適応させるプロセスは理に適っているとアーレントは言う (OT: 445ff.)。そのプロセスの第一のステップが、人々を法律や国家の枠外に置き、法的手続きとは無関係に強制収容所に送ることによる、人間の法的人格の殺害である。次のステップは、人間の道徳的人格の殺害である。これは収容所が社会的な意味を喪失した忘却のシステム (veritable holes of oblivion) の一部であり、そこでの殉教や抗議、連帯といったことが不可能にされることによる。そして最後に行われるのが、人間関係の自明な前

提をなす人間の個性性 (individuality)、唯一性 (uniqueness) の殺害である。このようにして収容所は、人々に全体主義的な訓練を施し、人間のすべての自発性 (spontaneity) を取り除く実験を行うことで、全体主義体制の権力の維持に大いに役立つのである (OT: pp. 451ff.)。

(3) 「イデオロギーとテロル」 (1953年)

1953年に書かれた「イデオロギーとテロル」は、アーレントの当時のマルクス研究の成果であり、『全体主義の起原』のドイツ語版、英語版第2版に収められている。この中で彼女は、全体主義は、専制、暴政、独裁といった他の政治的抑圧の形式とは本質的に異なるものであり、法的、政治的、常識的功利主義的なカテゴリーではそれについて判断し予見することができないものであるとしている (OT: p. 460)。彼女はそうした先例のない全体主義的統治の本質として、法則への服従、テロル、イデオロギーをあげる。

法則に服従する人間

全体主義的統治は、法による統治と法なき統治という政治哲学における統治についての二者択一を覆した。伝統は法に従った統治を正統なものとし、法なき統治を恣意的な正統でないものとしてきたが、こうした理解のもとでは全体主義は法 (則) に従っている点で正統なものと同分類される。なぜなら全体主義は実定法を無視したものの、ナチにおいては「自然」の法則に、ボリシェヴィキにおいては「歴史」の法則に従うと主張していたからである。全体主義において、こうした法則はすべて運動の法則であり、人間という種がそれを担い、正しく実施することで人類というのが出現すると期待される。

本性としてのテロル

そしてこの運動法則を実現するのが、全体主義的テロルである。テロルは「客観的な敵」の排除を行うなかで、全体のために個を減らし、人々が自由に動くための空間を破壊し、人間の複数性を

消滅させ、支配下に生きる人々を巨大な「一人の人間」に変えようとする。

原理としてのイデオロギー

全体主義的統治の下にある住民、テロルにより「一者」となった人々の行為の原理となり、彼らの行動を導くのがイデオロギーである。イデオロギーは、過去から現在にいたる運動とその歴史、未来についての予言を説明し尽そうとし、経験や事実を全く無視して、一つの前提から推論された演繹、その首尾一貫性によってすべてのものを整理しようとする。

こうした法則への服従、テロルによる締め付け、イデオロギーの自己強制力は、互いに呼応し合って全体主義の世界を構成し、その展開を推し進めていく。この中で人々は共通の常識もアイデンティティも失って、自己も他者も世界もなく、思考や経験を行う能力をもたない孤絶 (loneliness) の状態となる。孤絶は、人間が物を作るときに必要な、政治的領域からの退出や、思考する際の独りで行う自己の内部での対話とは全く異なるものである。アーレントによると、我々は孤絶を特徴とする大衆社会、そして全体主義というまったく新しい統治形態を生み出してしまったという事実とともに生きているのである。

第2節 アーレントのカール・マルクス論

マルクス研究への取り組み

『全体主義の起原』初版の意図は、全体主義を理解すること、全体主義の前例のなさを理解することにあった。その後彼女は全体主義、特にスターリン下の全体主義体制へ至る道程を理解するために、「マルクス主義の全体主義的要素」の研究に着手した。彼女はナチの全体主義が反ユダヤ主義という近代的なイデオロギーに基づいていたのに対し、ソヴィエト・ロシアの全体主義は西洋政治思想の伝統との関連で理解する必要があると考えた。

彼女がマルクスとマルクス主義についての研究を始めたのは、それらが全体主義の出現以後の

我々の世界の前例のなさ、受け継がれてきた西欧政治思想の伝統との間のズレをつなぐものとして考えられたからである。この研究において当初アーレントが問うたのは、マルクスはどれほど伝統を継承し、どれほどそれを断ち切ったのか、マルクス主義のなかにソヴィエト・ロシアにつながる要素はどれほど見出せるのか、スターリン・ボリシェヴィズムにおいてマルクス主義はどのように利用されたのか、といったことであった（Weisman 2014: pp.12f.）。

アーレントの1951年時点での計画は以下のようになっている。

- 第Ⅰ部 人間を働く動物であるとするマルクスの概念を主に扱うことによる、マルクス思想の概念的分析。
- 第Ⅱ部 1870年から1917年の社会主義者の政党と運動の歴史を通じた、マルクス主義と社会主義の歴史的分析。特に全体主義的な政治・歴史につながるような特定のイデオロギー的側面の発展に注目する。
- 第Ⅲ部 レーニンからスターリンへの移行期。コミニズムとボリシェヴィズムについての政治的・歴史的考察。（Weisman 2014, p.12）

つまり、当初アーレントは、第Ⅰ・Ⅱ部においては全体主義につながり得る特定の概念と出来事の検討を、第Ⅲ部においては全体主義支配の出現についての考察を企図していたといえる。しかし彼女はすぐにこの計画の幅が狭かったこと、歴史的分析和概念的分析はそれほどうまく区別されず、個々の概念はすべてその起原・過去・現在・未来という大きな枠組みのなかに位置付ける必要があることに気付いた（Young=Bruehl 1982: pp. 276ff.）。これによりアーレントはその第Ⅰ部に関わる問題に注意を注ぐようになり、第Ⅱ・Ⅲ部で扱われるはずであった諸問題についてはまとまった形で論じることがなかった。

結局この第Ⅰ部に関わる研究が完成されることもなかった。しかしこれは今日、いくつかの形で読むことができる⁴。本節では、Weisman 2014を手掛かりとしつつ、アーレントのマルクス論、特にマルクスにおける伝統の継承と断絶、そして彼の思想がどのようにスターリン全体主義と関係があるのかについてのアーレントの理解について論じたい⁵。Weismanの著作は、のちに見るような三つの観点から、アーレントのマルクス研究と全体主義論との連関を検討している。本論文ではそうした連関を、『革命について』にまで広げて見出すを試みる。

アーレントはマルクスに全体主義に対する直接の責任があると考えているのではなかった。彼女がマルクスに注目したのは、彼が我々の時代の困難（predicament）について非常に早い時点で考えていたとともに、20世紀において彼の思想が全体主義に利用されたのではないかと考えるからである。またマルクスはプラトン以来の伝統とその断絶の結節点にいる人物であるとされる。マルクスは西欧政治思想の伝統をいくつかの点で継承するとともに、18世紀の政治革命、19世紀の産業革命という近代世界の基盤となる経験を踏まえ、いくつかの重要な点で伝統を転換し、断絶させたのである（Arendt 1953a）。アーレントはマルクスのどのような点に、伝統との継承と断絶、全体主義へつながり得る要素を見出したのだろうか。

以下ではアーレントのマルクス理解を、彼女がマルクス思想の3つの柱であるとする「労働が人間を創造する」、「暴力は歴史の助産師である」、「フォイエルバッハについての第十一テーゼ」に分けてそれぞれ見ていきたい（Arendt 1953g）。あらかじめ前節の全体主義論との関連について述べるならば、第1の柱は「大衆社会」に、第2の柱はテロルに、第3の柱はイデオロギーにそれぞれ関連している（Weisman 2014: p. 2）。つまり、前節の最後に触れた「イデオロギーとテロル」で示された全体主義の性質は、このマルクス研究と密接に関わっているのである。

(1) 「労働が人間を創造する」

第一の柱「労働が人間を創造する」について検討する。アーレントによると、ここにはマルクスの当時の経験と出来事への洞察が反映されているという。18世紀までの伝統において、政治的共同体の正統なメンバーは、労働や生活の必要に拘束されていないエリートや土地所有者らであった。これに対し18世紀の終わりにアメリカとフランスで起こった政治革命は、労働者も含めた広い範囲の人々に自由の扉、つまり政治参加の道を開いた。さらに19世紀の産業革命とそれ以降の発展は、労働の「生産性」をかつてないほどに高めることとなった (Arendt 1953k)。

アーレントはマルクスの特質を、これらの出来事が持つ意味を把握し、労働を賛美してその価値を高め、人間を「労働スル動物 (*animal laborans*)」と定義づけたこと。さらにその人間を事物を作り出す生産者、制作者であるかのように語ったことに見る (Arendt 1953k)。

『全体主義の起原』初版においてアーレントは、のちの『人間の条件』の中でまとまった形で論じられるような労働 (*labor*) と制作 (*work*) の区別を行っていなかった。しかし『全体主義の起原』初版出版後、マルクス研究に取り組むなかで、1951年から1953年の間に彼女は両者を区別するようになる⁶。

制作とは、主体が他のものを支配する行為の様式である。制作する者は原理的に他者の助けを借りることなく、孤立 (*isolation*) の中で制作を行う。この孤立はひとりであることを意味するが、制作によって世界を構成するものを作り出すという点で、孤立した人は世界に関わっているといえる。また制作者は、来るべき制作物についてのイメージをもとにして自然や材料を暴力的に作り変えたとともに、中断・修正・元に戻すといったことを含め、制作過程の始めから終わりまでを支配する。

それに対し労働とは人間が生命過程を継続させるために一定の行動のサイクルを強いられる行為の様式である。人間は個体としての死、集団とし

ての滅亡を回避するために、食料の生産と消費、新たな個体の再生産＝繁殖 (*reproduction*) を継続しなければならない。労働が行われるのは、生物としての過程が持つ必然性の強制力 (*force*) に人間が駆り立てられているからである。この過程においては個々人の唯一性 (*uniqueness*) や善く生きるといったようなことは何の意味ももたない。この労働において人間は、自分が生きることによりのみ専念し、自然との物質代謝 (*metabolism*) に閉じ込められているために無世界的であり、世界や他者とのつながりを持たず、孤絶 (*loneliness*) の状態にある。また、古代ギリシア以来の西欧政治思想の中で、労働は必然性に基づいていて自由でないために軽蔑され、政治の外部にあるものとされてきた。

ここで、「労働が人間を創造する」という第一の柱において、西欧思想の伝統と全体主義、それぞれとマルクスの関係についての、アーレントの考えを見てみたい。西欧哲学思想の伝統においては、人間 (*man*) の定義が動物との関連・ちがいで語られてきたという。哲学者たちは人間には動物性があるということを認める一方で、そこから区別し得る人間的な性質があると考えてきた。例えばアリストテレスは、自由を持たず政治に参加しない奴隷を動物であるとみなした。彼においては、社会的であるだけでなく、自由に言論を行い、政治的な決定や支配に積極的に参加してこそ人間、つまり「政治的動物 (*zoon politikon*)」であるとされた (Arendt 1953b)。

マルクスは、18世紀の政治革命と19世紀の産業革命以後の社会への洞察を踏まえ、「労働スル動物」こそが人間の定義であると考えた。動物性と人間なるものの区別という観点からみると、西欧哲学思想の伝統の継承に見えるが、アーレントはむしろここにある転換を強調する。その転換とは、マルクスがすべての営みを個人の生命の維持、生計を立てることに還元したことであり、古代以来、労働は仕事と区別され、人間の活動力のうちで最も蔑まれてきたとされる。しかし、彼は伝統において区別されてきた仕事と労働

とを、すなわち技術・技芸と生活に必要なものを稼ぐこととを結び付けて考えたのである。

マルクスのこうした労働の格上げ、尊厳視は、確かに産業革命以降の社会の変化を正しく捉えていた。しかしマルクスは、労働の基本的な性格を見落としていたとアーレントは言う。つまり、労働という営みはその本性上、自己の生存にのみ専念する、人間と自然との物質代謝であるために、世界や他者から孤絶した人間に関わっているということである (Arendt 1953k)。

ここにマルクスの思想とスターリン全体主義のつながりの一側面が見出される。前節で見たように、スターリン全体主義運動がその全体主義的発展の始めのステップとして行ったのは、大衆社会の創出であった。大衆社会は、人々をバラバラにし (atomize)、それぞれを世界や他者とのつながりを絶たれた孤絶の状態に置くことによって成立する。アーレントは、この大衆社会創出の正当化に利用され得る要素を、マルクスによる、自己の生命を維持する労働という観点からの人間理解、世界から孤絶した労働スル動物としての人間理解に認めているのである。

(2) マルクスのフォイエルバッハについての第11テーゼ

次に第三の柱であるマルクスのフォイエルバッハに関する第11テーゼについて検討する。このテーゼは「哲学者たちは世界を様々な仕方で解釈してきた。しかし重要なのは、世界を変えることである」というものである。ここでは哲学と政治の関係が問われている。

伝統の継承についてアーレントは、マルクスがヘーゲル哲学を継承したことを指摘する。それは上記テーゼの「哲学者たちは世界を様々な仕方で解釈してきた」という前半部分に表れている (POP: pp. 76f.)。ヘーゲルは、個々人の意図を超越した絶対的なものから政治的領域を理解するという点であくまでも伝統的な哲学者にとどまっていた、とアーレントは言う。またヘーゲル哲学が行う過去を振り返ることも不正や逸脱を正当化

し得るとはいえ、世界に対して直接影響を与えるということはほとんどなかった。

マルクスの思想とヘーゲル哲学の重要な相違は以下の点にみられるとアーレントは言う。それはマルクスが目を開ける方向を転換したことである。ヘーゲルは、過去を振り返ることによる過去の解釈にとどまっていた。それに対しマルクスは、弁証法的過程を未来に向け、人間事象の領域におけるすべての歴史的变化を貫く歴史の法則を、そこにおける生産関係を観察することによって発見できるとした。そして革命政治によって、その歴史法則に歴史を結合させることができると主張した (POP: pp. 70ff.)。

こうしてマルクスは歴史と過去の政治的行為とを結び付けて理解した。しかし第一の柱についての考察で見たような「労働スル動物」が織りなす諸活動や、そうした弁証法的に自己発展する法則は、アーレントの労働理解においては必然性に従属することを避けられない。さらにこうした歴史的必然は、労働スル動物に従わせることで、物質的な力を獲得し、これによりマルクスの言う「世界を変える」力が実現される。ここにマルクスの思想が全体主義に結びつき得る第二の点を見出し得る。すなわち、マルクスの思想に由来する必然性の法則は、孤絶した大衆を全体主義的支配の内部において行動させるとともに、その支配に対して合法 (則) 性 (lawfulness) を与える、イデオロギーへとつながり得るのである。

(3) 「暴力は歴史の助産師である」

最後に第二の柱である「暴力は歴史の助産師である」について検討する。ここでは政治と暴力の関係が問われる。古代ギリシアや古代ローマにおいては、暴力は政治の反対物として理解されていた。そこでは政治は言論や説得によって行われ、そうした政治的な領域とその外の領域を隔てていたのが境界としての法であった。また伝統においても、暴力は国家間における最終手段 (ultima ratio) であったし、国内における暴力の使用は実定法により拘束されてきた。

こうした理解に対して挑戦したのが、マルクスの「暴力は歴史の助産師である」という主張であったとアーレントは言う。まず彼にとって、言葉によって表現される人間の営みは、法的政治的制度から詩や宗教に至るまで、すべて実際は暴力的行為であることを覆い隠すための単なる口実か正当化に過ぎないと捉えられる。そうした言葉による営みに反対して彼は、過去の政治的営みの記録である歴史が真の姿を現すのは、ただ戦争や革命を通してのみであるとした。あらゆる政治的営みは本来の暴力の準備か過去の暴力の結果として理解されねばならない (Arendt 1953b)。したがって彼にとっては、暴力やその手段の所有こそあらゆる統治形態の構成要素であり、国家は支配階級が抑圧と搾取を行うために用いる道具であった。このようにして政治の領域全体が暴力の行使によって特徴づけられるものとなった (Arendt 1953g)。

実際の支配関係を覆い隠して正当化する法律や制度に対し、マルクスが積極的なものとして唯一認めるのが、さきに見た歴史法則、運動の法則であった。この法則が力を発揮するのは従来の法律や秩序を廃することによってであり、歴史法則に従う暴力は、戦争や革命を通して社会に宿っている新しい秩序の胚を誕生させる役割を果たすとされるのである (Arendt 1953j)。こうした理解のもとでは、歴史の作り手たちが歴史法則に従って、公然とした暴力、さらには恐ろしいテロルすら手段として採用するということが十分考えられる。アーレントは、「暴力は歴史の助産師である」というマルクスの思想に、イデオロギーを実現するために行われる全体主義のテロルとのつながりを見出しているのである。

小括

このように、アーレントがマルクスに見出した三つの柱は、彼女の全体主義論における人間理解、人々を動かす原理、それを実現する暴力による政治にそれぞれ対応していた。時系列に沿うならば、本節でみたようなマルクス研究の成果が示

されたのが、1953年の「イデオロギーとテロル」であった。こうしたアーレントの三つの観点は、以下で見るように、革命論においても適用されている。

第3節 アーレントのロシア革命論

(1) 全体主義論、マルクス研究からの発展としてのロシア革命論

本節ではまず、前節までの議論を踏まえたうえで、『革命について』(1963/1965年)において主に論じられている彼女のロシア革命論について検討する。『革命について』はアメリカ革命とフランス革命の比較史的研究であり、前者が公的な参加や統治制度の創設などを考慮したとして高く評価され、一方で後者がそれらに失敗したものとして否定的に論じられる。また『革命について』邦訳の解説において川崎が述べているように、この著作はフランス革命批判を通したロシア革命とマルクス主義への批判となっている (川崎2010b: pp. 268ff.)。このことは、この本のなかでルソーとロベスピエールが批判される際、何度もマルクスとレーニンに対しても批判がなされることにもあらわれている。

以下で論じるように、そうした両革命批判には、前節でみたマルクス主義批判が投影されているといえる。つまり、必然性に従属した人間理解、人間を動かす原理、それを実現する暴力という三つの柱がフランス革命批判に適用される。そして、そうしたフランス革命の経過を引き継いだものとしてロシア革命が批判されるのである。

フランス革命の人間理解

アーレントが、フランス革命の人間理解において決定的であったとするのが、貧しい人民の流入という出来事である。革命の人々⁷はもともと国制の形成や公的自由のための空間の創設について関心を向けていたという。しかし、革命の初期において貧民が政治の舞台に流入してきたとき、この革命の方向は変化した。アーレントの理解では、この貧民は胃袋の欲求つまり生物学的な生命それ

自体の必要から生まれた怒り (rage) という強力な感情に突き動かされていた。彼らは生命過程の必然性－貧窮に支配されていたのである。そして彼ら貧民は、自由ではなく生活と幸福を求めている。こうした怒れる貧民の強力な力が、革命のコースを生命過程の必然性、不可抗力な流れへと変えてしまった大きな要因の一つであった (OR : p. 109ff.)。

フランス革命の人々を動かす原理

次いでアーレントが理解するフランス革命において、人々を行動させる原理の役割を果たしたのが、ルソーによる一般意志 (general will) と同情 (compassion) の理論化、そしてそれらをロベスピエールが政治の領域において実践したことによる両者の結合である。

アーレントの理解によると、ルソーの一般意志の特徴は、まず慎重な選択や意思への配慮を重視する同意 (consent) を唯一不可分な意志 (will) へと変化させたことにある。ここにおいて人民の意志は完全一致を特質とし、将来の政治体の統一はその人民の意志によって保証されることとなった。ルソーは、国内の多数の人々をこうした一つの意志を持った一人の人間に置き換え、国民を統一するために、外国勢力という国民にとっての共通の敵を想定した。さらに彼はこの目的のために、国内の市民の特殊意志と特殊利害のすべての合計を、国民にとっての共通の敵とした。一般意志つまり国民利害の発現は、個々の特殊利害とは相容れないため、個人が自身の特殊性と対立するときのみ、彼は真の国民となることができるということである (OR : pp. 76ff.)。

同情の情熱 (passion) とそれに対応する感情である哀れみ (pity) を理論化したのもルソーであった。アーレントによると、ルソーは他人の受難に向けられるもっとも自然な人間的感情は同情であり、したがってそれが真実の「自然的な」人間関係の基礎であるとしたという。ここでは自然状態における人間の善性が自明とされていた。またこの自然人理解は、ルソーが目撃した社会の腐

敗、理性の利己性から演繹されたものであった。社会のなかで腐敗した人間の存在から、新しくきれいな人間の存在を導き出したのである。人間は苦しんでいる人に対して同情するが、この同情こそが受難者の心を開き、他の人たちの受難に心を通わせ、それによって「自然的な」絆をつくるものとされた (OR : pp. 79ff.)。

ルソーは、上流社会の人々の無関心と理性の「無情さ」に抗して、感情が波立つ親密さ (intimacy) の領域をも発見した、とアーレントは言う。この発見以後、親密さは近代の感受性の形成に大きな役割を果たすことになるのであるが、この領域で同情が感傷 (sentiment) として見出されたとき、それは哀れみ (pity) としてあらわれるという。哀れみは強者と弱者を区別して、常に弱者に与する感情である。同情という情熱が他人と共に苦悩するのに対し、哀れみは他人に対して距離を保っている。また哀れみは感傷であるため、その広がりには際限はない。

アーレントによると、ルソーのこうした一般意志、同情という情熱、哀れみという感情を政治の領域に持ち込んで実践に移したのがロベスピエールであった。彼は、ルソーの一般意思、個人の特殊利害と全体の一般意思の対立という理論から、徳と無私の同一視を行った。これは、人間や政策の価値は、それがどれほど特殊利益に反しているかによって決めるという、無私こそ徳であるという態度であった。また、ロベスピエールは、他人と共に苦悩することを徳の源泉とし、政治の領域にいる貧民に対して同情の情熱を向けた。しかし、このように同情が特定の人や苦悩ではなく、絶対的多数の困窮する群衆に向けられたとき、ルソーの理論からの変化が起こった。すなわち同情が哀れみという際限のない感情に変わり、個々の人の苦悩にたいして特殊な関係を取り結ぶという能力を失ったのである。アーレントの理解では、この感傷の際限のなさによってロベスピエールは個々の人間のリアリティへの感覚を喪失したのである (OR : pp. 88ff.)。この一般意思の理論と際限のない感傷が結びついて、哀れみに支えられた

徳になったとき、ロベスピエールは法律を無視し、従来通りのような裁判を行うこともなかった。測り知れないほど多数の貧民の、測り知れない苦悩に取り組んでいるとき、公正な裁判や法律や原則といったことは重要な意味を持たないからである。

こうしてフランス革命の進路は、貧窮からの解放の緊迫性によって決定され、人民の悲惨とそれに対する哀れみという両方の際限のない広がりによって力を与えられることとなった。この現象をアーレントは、「すべてが許される (all is permitted)」という無法性と表現している (OR : pp. 91ff.)。

フランス革命における暴力、テロル

アーレントによれば、フランス革命において政治に暴力が入り込んできたのは、王政対共和政の問題が外国の武装侵略対フランス国民という問題に変わった瞬間であった。つまり、革命における権力の構成が暴力を用いて行われる内乱と対外戦争へと転化した瞬間である。統治形態や革命の問題が戦場で決せられるとき、暴力の混沌が運命を左右することとなるとアーレントは言う。彼女の理解では、権力は複数の人間が共同で活動するところに現れるものであり、それは暴力によって無力とされ滅ぼされ得るものである。

そしてこの暴力は、ロベスピエールによって恐ろしいテロルとして現れた。これは以下に見るような彼の二つの結びつけに由来する。一つ目は、先に述べたように、彼が絶対的多数の群衆に向ける際限のない哀れみを徳と結びつけたことによって、「すべては許される」という無法性が生まれた。これにより、貧困からの解放と人民の幸福を実現するためであれば、限りのない暴力の使用が許されることとなった。二つ目は、彼が徳を心の特性と同一視した点にある。心の特性は暗闇を必要とし、公示されてはならないものである。もしこれを公の光に当てようとするれば、それはその後にふたたび別の動機を潜ませた「単なる外観 (appearance)」となってしまう。心を無理やり

公の領域や他人に対して明らかにしようとすれば、それは偽善や欺瞞として現れざるを得ない。このため、心を暴こうとするロベスピエールによる徳の支配は、もとより実行不可能であるため、偽善者をつくり出して狩り出す終わりのない殺人過程へと陥ってしまったとアーレントは言う (OR : pp.94ff.)。

こうして際限のない哀れみに支えられ、人間の偽善や悪徳を暴露しようとするロベスピエールの政治は、隠れた敵 (hidden enemies) に対する恐ろしい「徳のテロル」として展開されることとなったのである。

小括

アーレントのこうしたフランス革命理解は、全体主義論やマルクス研究以来の観点から構成することができる。群衆に対する人間理解、人々を動かす原理、政治における暴力という三つの観点である。またフランス革命におけるそうした原理や暴力の現れには、ルソーとロベスピエールが大きな役割を果たしていた。ルソーが理論化したものを、ロベスピエールが政治の領域に持ち込んで実践したのである。これと同様の観点は、彼女のロシア革命論においても見出すことができる。

(2) フランス革命の過程の模倣としてのロシア革命論

アーレントのこうしたフランス革命理解を踏まえつつ、彼女のロシア革命を検討する。それは、マルクスによるフランス革命の出来事の経過の理論化、そしてレーニンによるその実践に対する批判という形で展開される。

マルクスによるフランス革命の過程の理論化

マルクスによるフランス革命の理論化についてみていきたい。アーレントによるとその特徴は、フランス革命の人々の経験でなくその革命の経過に目を向け、その過程を理論化したことにある。

一点目として、マルクスは大衆の貧困を政治的観点から解釈し、それが生活や幸福だけでなく、

自由を求める蜂起を必然的にもたらすものであると理解した。つまり、貧困は第一級の政治的な力になるという理解である。

二点目として、彼は貧困を搾取の結果として説明した。窮乏という必然性に拘束された状態は支配階級による暴力的な搾取の結果であるという理解である。彼はこのように、経済的所有関係を人間同士の関係に還元することで、支配階級に対する被支配階級の反抗精神を鼓舞しようとした。ここにおいて、彼は革命の手段としての暴力の使用を理論化したとされる。

三点目としてマルクスは、その暴力の結果としての貧困という関係を転倒し、暴力や抑圧や搾取を、歴史的に必然的な法則の現れであるとした。生命は最高の善であるとの前提とともに、この必然性は生命過程の強制的な衝動であると理解された。これによりマルクスの革命の目的は自由でなく豊かさ (abundance) となり、その展開は社会の生命過程の必然性に従属するものとして理論化された (OR: pp. 61ff.)。

ここには先に見たマルクス研究の成果、すなわち法則に従属する人間、その人々を導く必然性、それを実現する暴力という三つの観点が用いられているといえる。

レーニンによる実践

こうしたマルクスの革命理論を実践に移したのが、アーレントがフランス革命の最後の相続人、マルクスの最大の弟子と呼ぶレーニンであった。彼が関心を向けたのは、(フランスの貧しい群衆を見たロベスピエールと同様に) ロシアにおける貧困という社会問題であり、鉄鎖以外に何も持たない労働者、プロレタリアートの解放であった。彼は、アーレントの理解では教条主義的なマルクス主義者であったために、フランス革命の観察を経てマルクスが理論化した歴史的必然性の理論を信奉していた。

この歴史的必然への屈服が顕著に現れているのが、レーニン率いるボリシェヴィキ党の制度的なテロルである。歴史的必然という概念も制度的な

テロルという方法も、フランス革命の人々には知られていないものであった。それはその革命の過程を外から、または後の時代から眺めた人々によって生み出されたものであった。レーニンを含めた十月革命の人々は、フランス革命の諸事件の経過を観察してそれをモデル、根拠とし、制度的なテロルや自己粛清を革命に必要なものであると考えた。

ボリシェヴィキのテロルは、権力掌握前には主にイデオロギー的相違に基づいて行われ、掌握後は党が支配している官僚制内部の権力濫用を防ぐために行われた。こうした権力掌握前後のちがいはあるものの、両方に共通するのはテロルが歴史的必然に導かれて行われているということである。歴史的必然のもとでは、革命の進路は動と反動、革命と反革命によって決定されるため、罪人の有無や犯罪の内容の不確かさにかかわらず、革命に対する一定の「罪」が追及されなければならなかった。ここにおいてフランス革命の「隠れた敵」とは異なる、「客観的な敵 (objective enemies)」という概念が生じたとされる⁸ (OR: p. 98ff.)。

小括

アーレントのフランス革命論を通したロシア革命批判には、二つの特徴がある。一つ目は、マルクス研究以来の三つの観点からロシア革命論が捉えられていることである。つまり、貧困や必然に捕らわれた人間理解、歴史的必然という原理、暴力とテロルの行使である。

二つ目は、ルソーの理論をロベスピエールが実践し、徳のテロルに向かうというフランス革命批判と同様の構図が見られるということである。逆に言えば、マルクスの理論をレーニンが実践したロシア革命が、フランス革命のルソーとロベスピエールに遡って批判されているのである。

(3) 評議会と議会、政府との闘争としてのロシア革命論

アーレントが著したフランス革命論、ロシア革

命論は、以上のような1950年代前半のマルクスへの批判的研究の三つの柱の応用からのみ成り立つのではない。彼女のフランス革命－ロシア革命論には、評議会制対政党制というもう一つの重要な側面がある。

先に、両革命が必然性に拘束されて自由の創設という目的を失い、それに基づく暴力の行使によって悲惨な状況が展開されていく様を見た。しかし両革命とも、その経過のはじめから必然性に屈服していたわけではなかったとアーレントは言う。

フランス革命における人民協会とジャコバン政府の闘争

まずフランス革命について見る。アーレントによると、ロベスピエールを含めたフランス革命の人々も当初は、革命の最終目的が自由を構成することであり、革命政府の実際的な仕事が共和政を樹立することであると考えていたという（OR: pp. 141ff.）。また革命の初期においては、パリに多数のセクションが自発的に発生した。これらのセクションは、フランス国民議会の代表の選挙は行わずに、革命的な市の評議会、（1871年のものとは異なる）パリのコミューンを形成した。さらにこの他にも多くのクラブや人民協会が自発的につくられた。ロベスピエールも、はじめはこれらの協会を「自由の土台」「憲法の支柱」であり、公的精神や革命精神を表すものであると主張していた（OR: pp. 239ff.）。しかし彼は、1793年夏に革命政府の指導者になるとその立場を完全に変えた。すなわち人民協会に対して攻撃を開始し、それに対して代表制の形式、つまり国民議会をフランス国民の不可分の権力が存在する場所であるとしたのである。

革命的協会とジャコバン政府のこの闘争は、二つの側面としてとらえられるとアーレントは言う。平等を志向する街頭（the street）と権力を掌握して野心を高められた人々の政治体との闘争、そして自発的に権力を構成する人民（the people）と無慈悲に集権化された権力装置の闘争

である（OR: p. 244）。フランス革命におけるこの闘争は、中央政府による人民協会の壊滅に終わった。アーレントによると、それがなされたのは、革命的協会や市の評議会が政府に圧力を与えるとともに、公的権力を担い得る競争者となったからであった。

アーレントは、この闘争の中で示されたものを、人民協会の無党派的な性格であったとする。それに対して（ヨーロッパ大陸全体の政党制の草分けとなる）国民議会は党派の性格を持っていた。ここにおける各党派にとっての死活の問題は、他の党派すべてを支配することであった。ジャコバン派は、フランス人全体をただ一つの巨大な党機構とみなし、民衆や人民協会に浸透して国民議会に外部から圧力をかけることで、国民議会の支配を目論んだ。アーレントはここに、政党制のはじめから、多党制から一党独裁へとつながる傾向を見出している（OR: pp. 246ff.）。

ロシア革命におけるソヴィエトとボリシェヴィキの闘争

アーレントはロシア革命においても、こうした自発的な評議会と党が支配する中央政府という闘争を見出している。彼女によると、革命の歴史的必然性への従属を理論化したマルクスも、それを実践したレーニンも、自由の構成や新しい統治形態へと向かうきっかけとなり得る経験があったという。マルクスは1871年のパリ・コミューンにおいて、自発的な革命的評議会の発生を目撃していた。しかし、マルクスはそのコミューン政府が、自身の「プロレタリアート独裁」の概念に矛盾すると気づいたため、コミューン制度を革命の一時的機関に過ぎないとみなしたアーレントは言う。レーニンは1905年と1917年の革命のなかで、新しい評議会の自発的な樹立を目撃した。彼はこの経験を受けて、十月革命の本質を、党の役割と社会主義建設について触れずに、「電化（electrification）・プラス・ソヴィエト」と表現した。つまり彼は、その教条主義的なマルクス主義を離れて経済と社会を区別し、ロシアの社会問

題を解決するための技術革新と、新しい政治体としてのソヴィエト制度を主張したのである。アーレントの理解では、これはレーニンの政治家としての天分がもたらしたものであった。しかし、貧困の克服の困難に直面したことから、彼は結局、技術革新の問題も統治形態の問題もボリシェヴィキ党が担うものとしてしまったという (OR: pp. 65ff.)。

アーレントがロシア革命のなかに、よりはっきりとフランス革命と同様の過程を見出すのが、1917年以降のソヴィエトとボリシェヴィキ党の闘争である。まず二月革命のなかで、各地に労働者、農民、兵士の評議会、ソヴィエトが発生した。これらの自発的かつ雑多で独立したそれぞれの機関は、数週間後、地域的な上級評議会を形成しつつ、相互の協力と統合を進め、ついにはそこから全国を代表する会議の代議員を選挙するまでになった。アーレントの理解では、こうした評議会は自由の空間であり、自らを革命の一時的な機関であるとはみなさず、反対に統治の永久的な機関として樹立することを、すなわち共和政の樹立を試みていたという (OR: pp. 266ff.)。しかしその後、十月革命を通して行われたのは、フランス革命の人民協会とジャコバン政府の闘争と同様の過程であった。レーニンは国家機構をボリシェヴィキの党機構に置き換えることを目論みつつ、それと矛盾したスローガン「全権力をソヴィエトへ」を掲げることで権力を掌握した。そして1921年のクロンシュタットの反乱においてソヴィエトが党の独裁に反抗し、新しい評議会と政党制が調和できないことが明らかになったとき、レーニンはソヴィエトをボリシェヴィキ党の権力独裁に脅威を与えるものとみなし、その機能を破壊することを決めたという。そうしてソヴィエト制度は弱められ、無力な機関となったのである (OR: pp. 258ff.)。

小括

アーレントのロシア革命論においてはまず、必然性に従属して悲惨なテロルに向かったという側

面への批判が、フランス革命に遡りつつ展開された。この批判には全体主義論、マルクス研究以来の観点が適用されていた。しかし、アーレントのロシア革命論はそれだけでなく、評議会と議会、政党との闘争という側面があった。そこでは一党独裁に向かい得る政党制に対し、自由の機関である評議会が肯定的に論じられていた。前者のロシア革命論を全体主義やマルクス主義への理解と批判の試みであるとすれば、後者はそれに対する彼女の積極的な政治理論としてとらえられる。次章では、後者の評議会制論について、その理論の由来をローザ・ルクセンブルクの思想に探る。

第2章 アーレントとローザ・ルクセンブルク

本章では、ローザ・ルクセンブルクの思想、特に彼女の自発的大衆ストライキ論と評議会制論を中心に検討し、アーレントの評議会制論への影響について考察を行う。

ヤング＝ブルーエルは伝記のなかで、アーレントがハンガリー革命以前からルクセンブルクの「自発的革命」に洞察を得ており、『人間の条件』執筆前にアーレントがルクセンブルクの『ロシア革命論』を読んだと述べている (Young=Bruehl 1982: pp. 293ff.)。アーレントが『革命について』において、注で『ロシア革命論』に言及している (OR: p. 264 no. 82)。またアーレントは評議会制について論じる際に「自発的な」という言葉を多く用いており、ヤング＝ブルーエルが言うように、彼女がその評議会制構想の重要な側面をルクセンブルクの理論に負っていることが推測される。しかし、1918年に獄中で書かれたルクセンブルクの『ロシア革命論』では彼女の「自発的な」大衆行動の理論がまとまった形で展開されておらず、その内容が明らかでない。そのためルクセンブルクからアーレントへの影響の内実も、『ロシア革命論』からだけではなかなか見えてこない。ルクセンブルクの自発的大衆行動論を理解するためには、1900年代初頭の彼女の著

作に遡る必要がある。その延長線上で『ロシア革命論』を理解してこそ、アーレントがルクセンブルクをどのように引き継いだのかを明らかにすることができるだろう。

第1節 ルクセンブルクの自発的革命論

本節では、まず1900年代の初頭のルクセンブルクの大衆ストライキ論と党組織論を検討する。前者は1902年のベルギーでの選挙権改革運動と1905年のロシア革命という二つの出来事から発しており、後者は主にレーニンの『一步前進、二歩後退』（1904年）に対する反論の中であらわれている。それらを把握したうえで、1917年の小論と1918年『ロシア革命論』獄中草稿を検討し、そこで展開されているルクセンブルクの主張を明らかにしたい。

（1）1900年代初頭のルクセンブルクの大衆ストライキ論

「三度ベルギーの闘争を論ず」（1902年）

ルクセンブルクは、1902年にベルギーで起こった普通選挙権要求の運動において行使された大衆ストライキを分析し、『三度ベルギーの実験を論ず』（1902）を執筆した。ここでは大衆ストライキにおける強制力の問題と、ストライキの分類について論じられている。

ルクセンブルクは、暴力＝強制力（Gewalt）を用いた大衆運動を否定せず、それをむしろ自然の力によって推進される基本的な社会現象であるとする。この問題について、社会民主党内の日和見主義者すなわち議会主義的改良主義者は、ブルジョア的「合法性」を有する議会制度の到来した今日、強制力はもはやその歴史的役割を終えたと言っている。しかし、ルクセンブルクはこれに同意しない。なぜなら「合法的な」現代国家も、ブルジョアジーの経済的基礎から発する特定の政治的強制力の社会的な現象形態に過ぎないからである。こうしたブルジョア的合法性という強制力の下で、プロレタリアートだけがこの階級との闘争において強制力の行使を断念するような理由はない。

むしろプロレタリアートと社会民主党は、それを手段のひとつとして保持しなければならないのである⁹。

またルクセンブルクは、ゼネラル・ストライキを、アナキスト的ゼネラル・ストライキと政治情況的大衆ストライキに分類した¹⁰。ルクセンブルクによると、アナキスト的ゼネラル・ストライキは、場所的要素や時間的要素、各国の具体的な階級闘争の政治的条件を無視するものである。またそれは、社会主義的な闘争と、日常的なプロレタリア闘争や段階的な啓蒙活動との有機的な結合を考慮しない。それに対し、政治情況的大衆ストライキを、煽動手段や闘争手段の不可欠の一環をなすとともに、議会における権利の（ベルギーにおいては普通平等選挙権の）獲得のために貢献するものであるとする。その上で彼女は、ドイツにおいても、その社会的、政治的条件を考慮した政治情況的大衆ストライキの可能性が捨て去られていないことを主張した¹¹。

「大衆ストライキ、党および労働組合」（1906年）

こうした論点を洗練させて著したのが、1905年のロシア革命がもつ意義について論じた『大衆ストライキ、党および労働組合』（1906年）である。ルクセンブルクは、1905年のロシア革命が大衆ストライキの観念を根本的に修正し、労働運動の発展に新たな局面をもたらしたとする。その修正の一点目は、ロシア革命がアナキズムに歴史的な清算を与えたということである。これまで、戦闘開始と直接行動のみを目指すむきだしの革命的行動は、短命ではあるとしても急激な勝利をおさめるのにうってつけであると考えられてきた。しかしそれはロシア革命において何の役割も果たさなかったとルクセンブルクは言う。アナキズムの歴史的な生命は、ほとんど終わりを告げているとされる。二点目は、ロシアにおける大衆ストライキが、議会闘争の条件をつくり出す手段となったことである。すなわち大衆ストライキは、日常の政治闘争を回避していきなり社会革命を目指すようなものではなく、プロレタリアートが政治上

の権利や条件を獲得するのに役立つことが明らかになった¹²。

ロシア革命の過程とこうした修正を考えあわせるならば、大衆ストライキの重要な性質は以下の四点に示されるとルクセンブルクは言う。一点目として、大衆ストライキは、数年、数十年にわたる「階級闘争の長い道程をあらわす指標であり、ひとつの集合概念である」ということである。ルクセンブルクにとって1905年のロシア革命は、1902年やそれ以前にまで遡ることができるような一連のストライキ、階級意識と革命的エネルギーの高まりの歴史の中でとらえられる。そしてその諸ストライキは、目的や計画によって定められた短期間の個別的政治行動でもなかった。その大部分が、「自発的にspontan」、特殊地方的な原因から、目的や計画を持たずに始められ、次第に巨大な運動に発展していったのである¹³。

二点目は、大衆ストライキにおいて経済的要因と政治的要因とがはっきり切り離しえないということである。ロシア革命のなかで行われた大衆ストライキは、経済闘争から政治闘争へ進んだものもあれば、その逆のものもあった。大衆ストライキは、経済的契機と政治的契機という両面の統一体として行われるのである¹⁴。

三点目として、革命と大衆ストライキの結びつきが指摘される。ルクセンブルクにとって、大衆ストライキの歴史は、ロシア革命の歴史にほかならなかった。そしてこの革命とは、大衆ストライキの結果としての単なる流血の市街戦とは異なるものである。それは何よりも社会の階級関係の徹底的、根本的な転覆を志向している。そして彼女にとって組織や大衆ストライキは、革命のなかで生み出されるものであった¹⁵。

四点目は、大衆ストライキにおける意識的指導とイニシアティブの問題である。大衆ストライキが社会民主党の最高機関によって任意に引き出し得るようなものではない。それは、それぞれの大衆ストライキが別個の行動ではなく階級闘争の集合的な歴史を意味し、またこの過程が革命の時期と一致していることから明らかである。大衆スト

ライキは、労働者によってなされる、自然発生的なものである。これに対しイニシアティブや指導性を示す社会民主党は、状況に適応し、できるだけ労働者大衆の気分に着することが必要である¹⁶。

ルクセンブルクはこのような大衆ストライキの理論を立てつつ、つねに国際的なプロレタリアート、特にドイツにおける大衆ストライキの可能性について考えていた。彼女はまず、ロシアのプロレタリアートとドイツの労働者の生活水準がそれほど大きく変わらないこと、またドイツはロシアと異なって長らくブルジョア法秩序が続いてきたことを指摘する。そこから彼女は、ドイツにおいても経済闘争が自然発生し得ること、またドイツにおいて革命が始まったならば、歴史的必然の最終目標としてプロレタリア独裁が目指されることを示唆する。そしてドイツの社会民主党に対し、その内的分子を統一し、労働組合の経済的闘争と議会の政治的闘争とをひとつの階級闘争に結び付けていくような、指導的な行動力を求めた¹⁷。

このようにルクセンブルクの自発的な大衆ストライキ論は、1902年と1905年の出来事を考察する中で理論化された。この理論は、次に見る党組織論や評議会制論を導くこととなる。

(2) 党組織論をめぐるレーニンとルクセンブルクの1904年の論争

レーニン『一步前進、二歩後退』（1904年）

ルクセンブルクはこれとほぼ同じ時期に、レーニンと党組織論について論争を繰り広げた。ここでは1904年における二人の論争を概観する。レーニンは1904年に『一步前進、二歩後退』を執筆した。この書の主なテーマは、「党とは何であるか」の規定、そしてロシア社会民主党内の日和見主義者、議会主義的改良主義者に対する批判であった。以下要点を粗描する。

党について。レーニンは階級意識を持った活動的な党员と、その周辺にいる支持者を区別し、その混同を否定する。階級意識においておくれた人々や組織されていない人々は、労働者階級の前

衛部隊である党に所属してはならない。しかし同時に党は、より多くの労働者階級の支持を獲得してゆく必要がある。そのため、狭い陰謀者組織から自由でルーズな組織に至るまで、多様な形態の組織を党組織として取り込んでいかねばならない。また党が真の社会民主主義者たちから構成されて内部の不安定性がなくなればなくなるほど、より多くの労働者大衆に影響を与え、惹きつける。広汎な労働者を労働組合に組織してゆくことも、経済闘争の発展や仲間同士の意識的な働きかけのために重要である。これらの取り組みによって党の周りに惹きつけられてくる労働者大衆を組織し、彼らの階級意識を前衛的水準にまで高めることこそ、前衛部隊としての党の不断の任務である。加えて、資本主義的な工場が搾取者という負の側面を持つとともに、プロレタリアートを教育し統一する組織者としての側面を持つことも正しく理解しておかねばならない¹⁸。

労働組合などの組織、諸委員会や地方機関は、党の中央委員会の指導の下に置かれる。なぜなら、党の中央委員会が諸機関の自治の範囲の限界を定めることが規約に記されているからである。それに加え、そもそも自治の枠というのは、個々のグループ自身でなく、そのグループが一部分となっているところの全体によって定められるべきだからである。こうした組織形態を官僚主義、形式主義、専制などと言って非難するのは、プロレタリアート独裁を恐れるブルジョア的な現代版ジロンド主義、日和見主義の表明に過ぎない。そうした社会民主党内の日和見主義に対し、正統的社会民主主義は、階級意識を持ったプロレタリアートの組織と結びついて闘わねばならない。その闘争を行うのが、プロレタリア的傾向を持った現代版ジャコバン派、すなわちレーニンら革命的社会民主主義者なのである¹⁹。

ルクセンブルク「ロシア社会民主党の組織問題」 (1904年)

ルクセンブルクはこのレーニンの『一步前進、二歩後退』への批判として、『ロシア社会民主

の組織問題』を執筆した。この論考は、レーニンの過度な中央集権主義への批判と、階級の諸分子の性質を生得的なものとする彼の見方への批判からなる。

ルクセンブルクはまず、ロシアの社会民主党が中央集権主義を取るのは当然のことであるとす。なぜならロシアは、ブルジョア社会がすでに成立し、その下で労働者が一定程度まで政治的に訓練されているというような、他の国であれば通常存在するはずの条件がなかったからである。広汎な大衆の統一的な政治的行動のために必要な組織形態を、このような“ゼロ”の段階から準備しようとするれば、大規模な組織化作業は中央集権的にならざるをえない²⁰。にもかかわらずルクセンブルクがレーニンの党組織論を批判するのは、彼のそれが「超・中央集権主義的」な方向を示していたからである。そこでは、一面において、地方機関や諸組織に対する党の中央委員会による厳格な規律、決定的な関与が定められており、他面において、活動的な革命家たちが、未組織な支持者たちから明確に区別、分離されていた。この両面における仮借ない中央集権主義から帰結する二つの問題について、彼女は異を唱える。

一つ目が革命的運動についてである。レーニンにおける組織運動は、一面において、確固たる階級意識をもった党活動家と啓蒙されるべき周辺層の間に明確な峻別がなされた上で両者の結合がなされている。また他面において、すべての党組織がその活動のごく細部にわたるまで、党の中央機関に盲目的に服従するようになっている。ルクセンブルクは、これをブランキスト²¹的中央集権主義であるとみなす。ブランキスト的運動には、少数の奇襲攻撃実行者と人民大衆との間に内的なつながりが存在しない。またそれは蜂起に際して場当たり的な準備しか行わないがゆえに、外部の実行機関によって蜂起の中長期的な計画が決められることとなる²²。ルクセンブルクにとって、社会民主主義運動はこのような性質のものではない。社会民主党は、「労働者階級の組織と結合されているのではなく、労働者階級それ自身の運動」な

のである。そしてそれが行う社会民主主義的中央集権主義は、「労働者階級の啓蒙された闘う前衛の意志の絶対的集中の現れ」であり、「プロレタリアートの先導者層の“自己中央集権主義”」なのである。

ルクセンブルクの理解では、この社会民主主義的中央集権主義に必要な条件はまだロシアに十分与えられていない。すなわち、政治的闘争を通して教育された相当数のプロレタリア層の存在と、政治的自由の確立という条件が存在していないとされる。にもかかわらずレーニンとは、ロシアには既に極度に中央集権化された、大きな労働者政党を実現するための前提条件が存在していると考えている。これは倒錯した確信であるとルクセンブルクは言う。またレーニンは工場のようなブルジョア的國家のメカニズムによって、プロレタリアートを訓練し規律化できるとしている。これにもルクセンブルクは同意しない。プロレタリアートは、資本主義國家による訓練でも、党中央委員会の厳格な指導でもなく、「奴隸的な規律精神を打破し、根絶することによって」はじめて、「社会民主党の自発的な自己規律へと、教育されうる」のである²³。

したがって社会民主党にとって重要なのは、闘争の諸形態にたいする正しい歴史的評価を保ち、「プロレタリア階級闘争の終局目標の見地から、闘争の所与の局面の相対性ならびに革命的諸モメントの必然的昂揚にたいする生きた感覚をもつ」ことである。出来合いの目論見を予め立て、それをあてはめることではない。レーニンのように否定的性格をもつ絶対的権能を党中央に与えれば、その党活動は個々の組織に対する統制、制限、締め上げとなるであろう。そして次のことが明らかとなる。社会主義的中央集権主義とは、あらゆる段階であてはまる絶対的概念ではなく、労働者大衆の啓蒙や政治的訓練、そして彼らの闘争の過程で発展してゆく、ひとつの傾向、精神だということである。そうした傾向の現実化や組織の精神が、社会民主主義的大衆運動の賛同者たちに、排他的性格でなく、「協同的包括的性格を条件づけ

る」であろうとルクセンブルクは言う²⁴。

二つ目が、階級への理解の仕方についてである。レーニンの『一步前進、二歩後退』で展開されたそうした超・中央集権主義は、社会民主党内の日和見主義者への対決として提示されていた。ルクセンブルクの理解では、そのパンフレットのなかでレーニンは、インテリゲンチヤが示す自治主義に対する偏愛、官僚主義への嫌悪を、彼らの生まれながらの日和見主義的性格であるとしている。またその一方で、プロレタリアートの生得の諸能力を称賛し、その階級本能によって彼らは、最上級機関から峻厳に規律化されることに喜んで身を委ねるとしている。ルクセンブルクに従えば、こうした理解はまったくマルクス主義的、革命的でない。インテリゲンチヤにせよプロレタリアートにせよ、その具体的歴史的基盤の上にその能力や性格を理解しなければならない。西ヨーロッパでの組織形態の問題を機械的にロシアに移し替えるのではなく、ロシアの所与の具体的状況を考慮しなければならない²⁵。

レーニンは社会民主党内の日和見主義に対し、厳格な党規約によってそれらを労働者階級の運動から遠ざけようとしている。しかしルクセンブルクによると、これは無力な方法である。党規約だけでは、ブルジョア自由主義の政治的破産や小ブルジョアの経済破産といった急な変化の局面において大量に発生する非プロレタリア分子の流入を退けられないからである。むしろ社会民主党はそうしたブルジョア社会秩序の抑圧の犠牲者にとっての避難所とならなければならない。そして彼らの非プロレタリア的精神を革命的プロレタリア的行動に結合し、彼らを同化し、吸収することが肝要である²⁶。

またルクセンブルクによると、党内のブルジョア分子の発生は、外部からの流入のみに原因があるのではない。むしろ社会民主主義的闘争それ自体の内的な矛盾のなかにその源泉がある。日和見主義的混迷は社会的な諸条件から発生するために、それを予め防ぐことはできない。弁証法的社会民主主義的運動の過程のなかでこそ、そうし

た混迷は克服される。こうした運動の過程において、労働者階級の大衆的自我が形成されてくるのであり、勝利を目指すプロレタリアートの世界史的な前進が継続されるのである²⁷。

ここに示されているのは、ルクセンブルクにおける党と大衆の関係である。党はその下部組織や大衆に対して具体的な指令をしたり、彼らを支配したりしてはならない。むしろ党はプロレタリアートと一体であるとされる。こうした党組織論は、彼女の自発的な大衆行動論から帰結するものであるといえる。

（3）1917年の二月革命以後の小論

その十数年後、ルクセンブルクが1917年のロシアでの二つの革命を目撃するなかで論じたことについて検討する。

「二つの復活祭教書」（1917年5月）

ルクセンブルクは1917年5月に「二つの復活祭教書」という小論を書いた。この中でルクセンブルクは、1917年の二月革命において大衆が、絶対主義や反動的議会である国会（ドゥーマ）を敵に回して、直接的、自律的、革命的行動に立ち上がったことを指摘する。またその革命は、革命的なプロレタリアートによって構成される労働者と兵士の評議会（ソヴィエト）が、人民の権力機構、革命の権力装置になり得るということを示していたとする²⁸。

そうしたロシアでの革命的行動に対し、彼女はドイツの社会民主党の議会主義的行動を批判する。彼女によると二月革命は、世界史的な影響力をもった過渡的プロレタリア革命であり、それは必ずすべての資本主義にはね返ってくるものである。そうした過渡的プロレタリア革命は、ドイツや他の国におけるプロレタリア社会主義闘争を通してのみ完成される。したがってドイツの労働者はロシアのプロレタリアートに呼応して、ドイツ社会民主党の議会主義的なドグマを取り払わねばならないとされる。

この論考において重要なのは、以下の二点であ

る。一点目として、ロシアの革命に対してドイツのプロレタリアートが呼応する必要が論じられていることである。これは1906年で検討されたロシアとドイツにおける革命の可能性という議論を引き継いだものであり、次に論じる世界革命の議論へと発展する。二点目として、一点目以上に重要なのが、1902年以来論じられてきた大衆ストライキ、労働者の自発的な行動が、1917年の二月革命においても見いだされ、さらにここにおいてそれが労働者と兵士の「評議会」と結びつけられていることである。

「焦眉の時局問題」（1917年8月）

この問題意識を引き継いで書かれているのが1917年8月の「焦眉の時局問題」である。においてが置かれている困難について論じられる。

ルクセンブルクにとって、ロシア二月革命はプロレタリア的階級政策の表明、かつ世界史的な影響力をもった平和への突撃であった。平和をもたらすためには引き続いている世界戦争を終結させねばならないが、この手段として単独講和を採ることは許されない。なぜならそれは、一国を解放するためにヨーロッパの全プロレタリアートの運命を無視する、ブルジョア的な政策だからである。そのため全面講和を取り結ぶ必要があるが、ここにも困難が存在する。ロシアのプロレタリアートは、他国の帝国主義政府にまで決定的な影響を与えるほどの力を持ってはいないからである。また、ロシアの軍事的不活動という案も、ドイツから攻撃があった際、それを防ぐことができず、ドイツ帝国主義への奉仕となってしまうという難点がある。したがってロシア共和国は、どの方向に進むこともできないという悲劇的状况にあるといえる²⁹。

また、二月革命によってツァーリズムが崩壊して以降も、革命はそれを序章として諸階級の闘争を通して必然的に前進してゆく。この発展が向かうべき目標は、社会主義のプロレタリアートの独裁であり、現行の連立内閣は遅かれ早かれ正式のプロレタリア独裁、純粋な社会主義政権に席を譲

らねばならない。しかし、ロシアにおいてプロレタリアートの独裁が近づけば近づくほど、ロシアのブルジョアジーは反革命をより激しく行うであろう。現在、国内のブルジョアジーが反革命の姿勢を強く示していないのは、世界戦争が継続しているからである。また同様に、世界戦争が終われば、全ヨーロッパのブルジョアジーたちは、ロシアにおけるプロレタリアート独裁を阻止するために介入、侵攻してくるであろう。したがって、ルクセンブルクにとってロシアで頑強な反革命なしに社会民主主義的革命が進展できるのは、皮肉にも、世界戦争が継続している限りにおいてなのである³⁰。

こうした平和と社会主義という両面における袋小路を打開する唯一の解決策となるのは、国際的プロレタリアートの力によって帝国主義的世界戦争を終結させることである、とルクセンブルクは言う。連帯したプロレタリアートによる世界革命のみが、この国際的破局を打ち破ることができるのである。しかし、ここにも困難がある。「ロシア・プロレタリアートの革命的政策とヨーロッパ・プロレタリアートの腐敗した政策との間の基本矛盾」、すなわち「ロシアの人民大衆の階級行動とドイツ、イギリス、フランスの労働者大衆の階級利害および社会主義への裏切りとの間の基本矛盾」である。社会主義を裏切ってブルジョアの政策に屈するのではなく、「戦争か革命か」、「帝国主義か社会主義か」という二者択一を公言し、革命的結論を導いてゆくこと。これがこの困難な局面において唯一可能なプロレタリア的、社会主義的平和活動であるとされる。

ここではロシアのおかれた困難と、ドイツ・プロレタリアートの期待が語られている。こうした世界革命という唯一の解決策への期待は、次に見る1918年獄中草稿の前提となっている。

(4) 『ロシア革命論』獄中草稿(1918年)

次に、ロシア十月革命を踏まえたルクセンブルクの論稿をみる。彼女は十月革命について、1918年の9月頃に獄中で『ロシア革命論』草稿を執筆し

た。以下ではこれまでみてきた1902年から1917年にいたる彼女の著作からの連続と発展の上にこの獄中草稿をとらえたい。

日和見主義への批判

この獄中草稿ではまず、社会民主党の日和見主義者に対して批判がなされる。ルクセンブルクによると、ドイツの日和見主義者カウツキーやロシア労働運動の中の日和見主義メンシェヴィキは、ロシアを経済的に遅れた農業国であるとし、したがってそこにおいて社会革命やプロレタリア独裁はまだ不可能であるとしていた。したがって彼ら日和見主義者にとってロシア革命は、ツァーリズムの打倒でとどまるべきものであった。そのため、革命がプロレタリアート独裁へと向かうことは、過激な急進派ボリシェヴィキの誤りであり、革命に伴う困難や混乱はその誤りの結果として噴出したものとされる。

ボリシェヴィキの功績

ルクセンブルクはこうした主張に対し、1917年に明確に示されていた、プロレタリアートの世界革命という観点から反論を加える。ボリシェヴィキのレーニンやトロツキーが、革命の先頭に立ち、プロレタリアートの行動能力や社会主義の権力への意志を身をもって示したこと。この功績はまずもって認められねばならない。そして彼らがプロレタリアート独裁の樹立という社会主義革命の遠大な目標を、実際政治のプログラムとして示したこと。これも彼らの歴史的功績である。戦争とロシア革命が実証したのはむしろ、レーニンやトロツキーの決定的な一步に比べようとしない、ドイツ・プロレタリアートの未熟であった。カウツキーやメンシェヴィキの主張は、国際プロレタリアート、特にドイツ・プロレタリアートの歴史的な使命の遂行に対する責任を解除するものである。そしてそれは、ロシア革命の国際的な連関を否定するものである³¹。

つまり彼女は、社会民主党の日和見主義者を世界革命の観点から批判する一方、ボリシェヴィキ

の歴史的功績をまず何よりも認めている。そして権力を獲得したボリシェヴィキが、1917年の論考でみた平和を実現しようとする際の袋小路のなかにあること。またその状況に対する唯一の打開策としてのプロレタリアートの世界革命が、ドイツ・プロレタリアートの未熟ゆえになされないこと。こうした困難のなかをボリシェヴィキがなんとか進もうとしてきたことを彼女は認めている。『ロシア革命論』草稿の多くの部分はボリシェヴィキの政策や理論に対する批判である。しかしそうした批判はこのような、ボリシェヴィキの功績、戦争とプロレタリアートの未熟という困難、その中でのボリシェヴィキの前進、という彼女の認識の上で理解されねばならない。

ボリシェヴィキ批判

このようにルクセンブルクはボリシェヴィキの功績を認める一方、痛烈な批判も加えている。以下では農業政策と民族政策に対する批判は扱わず、民主主義やプロレタリアート独裁に関わる部分について検討する。

一点目として彼女は、憲法制定議会の解散について論じる。1918年1月、ボリシェヴィキは憲法制定議회를解散させた。この解散の理由をトロツキーは、その議会の選挙が十月革命という急変の影響が十分に広がる前に行われたこと、つまり革命の結果が議席に反映されていないことであると。このトロツキーの主張にルクセンブルクは同意する。彼女が批判するのは、1918年1月に憲制議회를解散したあと、それを再選挙しなかったこと。そしてトロツキーが、その憲制議会の特殊な欠陥から憲制議会はすべて不要であるとしたこと。さらに彼が、選挙は民衆のその場かぎりの気分や精神状態を反映したものでしかないため、革命期間中に普通選挙によって選ばれる人民代表制度すべてを役に立たないと結論づけたことである。ルクセンブルクは、こうしたトロツキーの不当な一般化に批判を向けている。

トロツキーの主張に対し、彼女は議会と民衆とのつながりを強調する。民衆の気分や政治的成

熟は代表機関に流れ込んで影響を与え、その代表機関の方向を決定づけていく。特に革命のなかでは、民衆の生き生きとした気持ちが、議会を変革の代表者に変えるということが起こり得る。たとえその議会がブルジョア的であったり穏健であったりしても、それを変え得る。民主主義の代表制度は確かに欠陥もあるけれども、それを除去してしまうのは、大衆の自由で精力的な生活を殺すことになってしまうと彼女は言う³²。

二点目として、ソヴィエト政府のもとで、出版の自由、結社・集会の権利が制限・廃止されていることをルクセンブルクは批判する。彼女が理解するプロレタリア独裁にとっては、大衆の政治的訓練や教育こそがその存続と発展の源である。その訓練や教育は、大衆自身の政治的、経済的、社会的な実際の経験のなかで得られる。労働者大衆の公共生活と政治活動のための民主主義的保障がなければ、そうした経験はなされえない³³。

三点目は、レーニンとトロツキーが社会主義的変革を、理論的に完成された手段を集め、それを具体的な状況に適用することであると考えることについてである。ルクセンブルクにとって、社会主義的原則というのはそのような個別的な処方箋を用意するものではない。むしろそれは、措置をとるべき方向を示す道標であるにすぎず、また何を最初に取り除くべきかを示す否定的な指標であるにすぎない³⁴。

四点目は、一部の人間が支配する政治への批判である。このように普通選挙や民主主義的な権利が廃止され、大衆の自由な論争が行われなくなれば、そこに残る唯一の活動的な要素は官僚制だけであるとルクセンブルクは言う。そしてその官僚制を率いるのは、数十人の党指導者、特にその中の傑出した十人ほどの首脳たちである。レーニンやトロツキーが考えるプロレタリア独裁は、一握りの政治家による独裁、すなわち徒党政治なのである³⁵。

ルクセンブルクは、これらの誤りを導くレーニン＝トロツキーの理論の根本的な誤りを、独裁と民主主義を対立させる点にあると指摘する。レー

ニン＝トロツキーは民主主義に対してプロレタリアートの独裁を支持しているものの、実際のところそれは、一握りの指導者によるブルジョア的独裁になってしまっているのである。ルクセンブルクが考えるプロレタリア独裁はレーニン＝トロツキーのそれとは異なる。彼女の理解でも、プロレタリアートがひとたび権力を握れば、すぐに断固として社会主義的措置に着手しなければならないとされている。つまりプロレタリアートが独裁を行うという点ではレーニン＝トロツキーと同じである。しかし、彼女にとってこの独裁は「あくまで階級の独裁であり、一党や一派の独裁ではない」。階級の独裁とは、「もっとも広く公開され、人民大衆がこの上なく活発、自由に参加する、何の制限もない民主主義の下での独裁」である。プロレタリアートが負う歴史的な使命は、あらゆる民主主義を排してしまうことなく、権力を握った際にブルジョア民主主義に代えて社会主義的民主主義を創始することである。彼女にとって、社会主義的民主主義とプロレタリアートの独裁は同義なのである³⁶。

小括

これまで見てきたルクセンブルクの議論を踏まえて『ロシア革命論』の要点をおさえておく。まず、ルクセンブルクはボリシェヴィキの社会主義的發展における功績を認めている。その上で世界戦争の困難と世界革命の望みがないなかでの、ボリシェヴィキの政策が批判される。またルクセンブルクは、議会という代表機関や出版・集会・結社の自由を擁護している。レーニンとトロツキーの社会主義的原則への理解、彼らによる徒党政治に対しては痛烈な批判を行なっている。ルクセンブルクとレーニン＝トロツキーには、社会主義や独裁について、根本的な理解の違いが存在する。ルクセンブルクがこのような社会主義的民主主義理解に至ったのは、1900年代はじめ以来の自発的な大衆行動論や、1917年に結実した評議会制論に基づいているからであると考えられる。

第2節 アーレントのルクセンブルク受容

(1) アーレントとルクセンブルク

アーレントとルクセンブルクのつながりを伝記的な面で確認しておく。アーレントの母マルタはルクセンブルクの熱烈な崇拝者で、1919年の始めにはスパルタクス団を支持して、まだ10歳を少し過ぎたばかりのアーレントを討論会に連れて行ったという (Young-Bruehl 1982 : p.27)。また、アーレントは1940年にハインリヒ・ブリュッヒャーと結婚したが、彼は若いころスパルタクス団やドイツ共産党に所属した経歴を持ち、かつてルクセンブルクやトロツキーの貪欲な読者であった。やがてその共産主義を捨てて、教条的マルクス主義の痛烈な批判者となる (pp. 124ff.) が、彼がマルクス主義や左翼運動などについてアーレントに与えた影響は少なからぬものがあつたのではないかと推測できる³⁷。また『全体主義の起原』ではルクセンブルクの『資本蓄積論』 (1913年) が参照されており³⁸、アーレントが早い時期から学問的にもルクセンブルクの思想に関心を持ち、その著作を読んでいたことが伺える。1968年に出版された『暗い時代の人々』においてはルクセンブルクに1章があてられている。

アーレントにとってルクセンブルクは、学問的にも経験的にも、大きな存在感のある人物であつたのではないかと考えられる。

(2) アーレントのルクセンブルク受容

アーレントは、前節でみたようなルクセンブルクの大衆ストライキ論と評議会制論を自発的革命論と呼び、その現実化を1956年のハンガリー革命にみた。彼女は1958年の論文のなかで、ルクセンブルクの「自発的革命 (spontaneous revolution)」をハンガリー革命に目撃したと述べている。

ローザ・ルクセンブルクの「自発的革命」—それは、先立つ軍事的敗北によって起こる意気消沈した混乱もなく、クーデタもなく、首謀者や共謀者の緊密に結びついた組織もなく、革命

政党の陰險なプロパガンダもない、抑圧されてきた人々による、まさに自由のための突然の蜂起、保守やりベラルやラディカルや革命家らが遠い夢として捨て去ってきた何か―がこれまでに存在したとするならば、我々は〔ハンガリー革命において〕それを目撃する特別な機会を得たのである。（亀甲括弧内、引用者。Arendt 1958: p.8）

アーレントの『革命について』はこの論文とほぼ同じ時期に書かれたものである。彼女は『革命について』の中で評議会制について論じる際、「自発的な」という言葉を何度も用いている。またアーレントもルクセンブルクも評議会制という政治形態に注目しており、それは両者の理論の中で重要な位置を占めているといえる。アーレントの自発的革命とそこから現れてくる評議会という政治理論は、ルクセンブルクの理論における自発的大衆ストライキと大衆の権力機関としての評議会とかなり近いものであると考えられる。

しかし、アーレントの自発的革命論とルクセンブルクの大衆ストライキ論を同じものとみなすことはできない。以下では評議会制という理論のもとになった出来事、経済的要素と政治的要素、評議会制の目標と役割、独裁理論への批判という四点について両者の異同を検討する。それによってアーレントのルクセンブルク受容の内実を明らかにしたい。

評議会制のモデル

ルクセンブルクとアーレントそれぞれに、その自発的な人民の行動と評議会制というアイデアをもたらした出来事を検討する。ルクセンブルクは大衆ストライキの理論を、1902年のベルギーの普通選挙権要求の運動、1905年ロシア革命から得ていた。そして評議会制は1917年のロシア二月革命の中でその重要性が見いだされていた。また、1918年末以降のドイツ革命に際しては、労働者と兵士のレーテに期待を寄せている³⁹。

アーレントは、18世紀末のフランス革命の人民

協会、1871年のパリ・コミューン、1905年ロシア革命の大衆ストライキとソヴィエト、1917年の二月革命のソヴィエト、そして1956年のハンガリー革命の評議会にそのモデルを見出している。

労働者の運動やパリ・コミューンについて同じ認識ではないことが考えられるが、両者は自身の評議会制の決定的なモデルのひとつを、ロシア革命におけるソヴィエトに見出す点で一致している。

経済的要素と政治的要素

決定的に異なるのが、革命過程における政治的要素と経済的要素の関係についての認識である。ルクセンブルクは1906年の論考において、政治的契機と経済的契機の統一が大衆ストライキにはかならないとしている。したがって彼女が考える大衆の自発的な行動には、労働者の政治的な権利の獲得とともに、労働時間の短縮や賃上げの要求が含まれている。

アーレントも、1841年の諸革命から1956年のハンガリー革命まで、ヨーロッパにおいて労働者階級と労働運動が果たしてきた重要な役割を認める。そしてそこにおいて、政治的要求と経済的要求、政治組織と労働組合の境界線が曖昧であったことも認める。しかし彼女は、それらが混同されてはならないとする（HC: pp. 215f.）。社会的・経済的要求がどれほど強いものであろうとも、アーレントが考える政治、新しい統治形態設立の問題はそうした要求と区別される。これは、彼女のよく知られている人間の活動力（activity）についての理解に基づいている。すなわち、「労働」や「製作」と異なり、人と人との間で行われ、新たな「始まり」をもたらし、最も政治と密接に関わっている「活動（action）」の枠組みによって、アーレントは革命を捉えているのである。

評議会制の目標と役割

評議会の目標と役割についても、両者の間に大きなちがいがみられる。ルクセンブルクにとって評議会は、プロレタリアートの独裁という目標に

向かって社会民主主義的の革命を推し進めるためのひとつの機関である。二月革命とそれに続く展開は、彼女にとって、評議会が労働者大衆の権力機関、革命の権力装置になることを示すものであった（「二つの復活祭教書」）。

アーレントにとっての評議会は、労働者だけでなく全市民が参加することが望まれるとともに、何よりも新しい秩序の確立を目指す機関である。これまで現れた評議会は自らを革命の一時的な機関であるとみなすことを拒み、反対に統治の永久的な機関となることを要求してきたとされる。また彼女は、評議会制は政党制に対して挑戦を行うものであると言い、その両者の闘争の歴史を描いた。アーレントの評議会は、政党と相互補完的に統治を行なっていくというよりは、統治を担う唯一の機関として構想されているように読める。これは、ルクセンブルクが『ロシア革命論』において示した、たとえそれがブルジョア的議会であっても、人民の生き生きとした雰囲気こそがそこに入り込んでいけば、それは革命的な議会に変わり得るという議論と異なっている⁴⁰。

独裁理論への批判

また、先に述べたように、レーニン＝トロツキーの独裁理論に対するルクセンブルクの批判は、彼女の自発的行動の理論、大衆の自由を擁護するという考えに由来していた。その批判は、普通選挙を行わず、出版の自由や結社・集会の権利を認めず、人民ではなく官僚のみが活発な、レーニン＝トロツキーらの徒党政治に対してなされたものであった。

アーレントは『革命について』の中で、これを引用し、以下のように述べている。

〔ローザ・ルクセンブルクの『ロシア革命論』にみられる〕「レーニン＝トロツキーらの独裁理論」批判は、今日でもその適切さとアクチュアリティを何一つ失っていない。たしかに彼女はスターリン全体主義の恐怖を予見することはできなかったが、政治的自由と公的生活の抑圧

に対する警告の予言的な言葉は、今日ではフルシチョフ下のソ連のリアリスティックな描写のようである。（亀甲括弧内、引用者。OR: p.264 n.82）

ここに示されているように、アーレントがルクセンブルクから引き継いだのは、自発的な評議会制に関する議論だけではなく、アーレントは、レーニンとトロツキーの独裁理論に対する批判を、自身と同時代のフルシチョフ政権に対する批判として継承している⁴¹。

小括

マルクス主義者であったルクセンブルクと、そうではなかったアーレントとの間には、やはり多くのちがいが見られる。アーレントは革命が目指すべき先をプロレタリアートの独裁とはしないし、人民の自発的な行動や闘争を歴史的な必然性のなかでとらえるというようなこともしない。第1章でみたように、そうした歴史の必然性、発展法則は、アーレントが強く批判するものである。また彼女は、革命の担い手を労働者階級に見いだすことや、経済的要素が政治的要素や政治を創設する革命に入り込んでくることも認めない。アーレントは、ルクセンブルクの大衆ストライキ論、評議会制論を、自身の政治理論、特に「活動（action）」の観点からとらえたといえる。また、レーニン＝トロツキーの独裁理論に対するルクセンブルクの批判をもアーレントは受容し、同時代のフルシチョフ批判として用いた。アーレントは、非マルクス主義の立場から、そして自身の政治理解に立って、積極的にルクセンブルクの理論を受容したのである。

結び

アーレントの諸著作の間の「失われた環」をつなぐために、彼女のロシア革命論を考察してきた。

第1章では、彼女のロシア革命論を、全体主義

論やマルクス研究との連続という観点から構成した。彼女はロシア革命を、18世紀末のフランス革命の過程を模倣したものとして論じた。ロシア革命の人々は、フランス革命の人々の活動ではなく、出来事を模倣したとされる。そうすることによってロシア革命の人々は、人を内部から強制するイデオロギーと外部から人を強制するテロルのもとで、歴史的必然性に従った。

そうしたロシア革命、そしてそのモデルとしてのフランス革命は、彼女にとって、必然性に押し流され、新しい政治体を構築することができなかった、いわば失敗した革命であった。そしてこの両革命を見る彼女の枠組には、マルクス研究以来の観点が用いられていた。すなわち、法則に従属する人間理解、その人々を外から強制する暴力、内側から強制するイデオロギーという観点である。彼女は、マルクス（主義）における革命理解をこうした三つの観点から捉えることで、スターリン全体主義というおそろしい政治体制へとつながり得る可能性を指摘したのである。

1917年のロシア革命はソヴィエト・ロシアの歴史にとっての決定的な起原でもある。これらのことを考え合わせると、彼女がロシア革命を論じた意図のひとつは、ソヴィエト・ロシア、特にスターリン全体主義への理解と批判の試みであったと捉えることができる。スターリン全体主義という強大な敵への批判の重要な手がかりとしてロシア革命があり、その両者をつなぐものとされたのがマルクスやレーニンの革命理解なのであった。

第2章では、アーレントのロシア革命論に見られる評議会制論を、ローザ・ルクセンブルクの受容という観点から考察した。ルクセンブルクは、労働者による運動に革命の希望を見出したマルクス主義者であった。彼女は同じマルクス主義者であるレーニンやトロツキーを、その歴史的功績を認めつつ、その独裁理論や社会主義理解について厳しい批判を行った。

アーレントは、ソヴィエト・ロシアにおける独裁に対する批判、そして自発的革命論について、ローザ・ルクセンブルクの継承者であった。アー

レントはマルクス主義者ではなかったため、ルクセンブルクの理論とは異なる点も多い。アーレントは政治的な運動に経済的要素が入り込んでくることを拒否するし、歴史的必然性という概念も認めない。しかし、アーレントは非マルクス主義者の立場からルクセンブルクの自発的革命論を受け継ぎ、自身の理論に取り込んだ。その受容の結実が新しい政治体を構築し、新しい政治を行ってゆく評議会制という理論である。そしてそれを、20世紀の怪物である全体主義に対する積極的な解決策として提示した。

この両考察を考え合わせるならば、アーレントのロシア革命論は彼女の思想の結節点であったと言えることができよう。彼女のロシア革命論には、全体主義への理解と批判の試みと、評議会制論という新しい政治理論があらわれていた。またそこには、1950年代はじめ以来の彼女の思想の発展と、彼女のルクセンブルク受容を見出すことができた。彼女のロシア革命論を構成することは、彼女の諸著作の間の「失われた環」をつなぐ、ひとつの手掛かりとなるのである。

参考文献

アーレントのテキスト

- BPF *Between Past and Future*, Penguin Books, 1968 (引田隆也・齋藤純一訳『過去と未来の間—未来への8試論』みすず書房, 1994年)
- DT *Denktagebuch: 1950 bis 1973*, hrsg. von Ludz, U. und Nordmann, I., Piper, 2003 (青木隆嘉訳『思索日記』I・II、法政大学出版会, 2006年)
- EU *Essays in Understanding: 1930-1954*, ed. by Kohn, J., Harcourt Brace & Company, 1994 (齋藤純一・山田正行・矢野久美子訳『アーレント政治思想集成』1・2、みすず書房, 2002年)
- EUTH *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, Piper, 1955 (大久保和郎・大島道義・大島かおり訳『全体主義の起原』1-3、みすず書房, 1972-1974年, 2017年)

HC *The Human Condicion*, Chicago University Press, 1958 (志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫, 1994年)

KMT “Karl Marx and the Tradition of Werstern Political Thought” (1953), edited by Jerome Kohn, *Social Research* vol. 69, no. 2, 2002 (佐藤和夫・アーレント研究会編訳『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』大月書店, 2002年)

OR *On Revolution*, Penguin Books, 1965(1963) (志水速雄訳『革命について』ちくま学芸文庫, 1995年)

OT *The Origins of Totalitarianism (New Edition with added Prefaces)*, Harcourt Brace & Company, 1973

POP *The Promise of Politics*, edited by and with an introduction by Kohn, J., Schocken Books, 2005 (高橋勇夫編訳『政治の約束』筑摩書房, 2008年)

VA *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, Piper, 1960 (森一郎訳『活動的生』, みすず書房, 2015年)

WIP *Was ist Politik?: Fragmente aus des Nachlaß*, hrsg. von Ludz, U., Piper, 1993 (佐藤和夫訳『政治とは何か』岩波書店, 2004年)

“Totalitarian Imperialism: Reflection on the Hungarian Revolution”, *The Journal of Politics*, Vol. 20, No. 1 (Feb., 1958), pp. 5-43

“Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—First draft—(folder 1 of 4). Hannah Arendt Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953a.

“Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—First draft—(folder 2 of 4). Hannah Arendt Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953b.

“Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—First draft—(folder 3 of 4). Hannah Arendt Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953c.

“Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—First draft—(folder 4 of 4). Hannah Arendt Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953d.

“Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—Second draft—Fragments. Hannah Arendt Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953e.

“Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—Second draft—Preface. Hannah Arendt Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953f.

“Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—Second draft—Part I. Hannah Arendt Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953g.

“Kari Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—Second draft—Part II. Hannah Arendt Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953h.

“Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—Second draft—Part III. Hannah Arendt

- Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953i.
- “Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—Second draft—Part IV. Hannah Arendt Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953j.
- “Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought,” lectures, Christian Gauss Seminar in Criticism, Princeton University, Princeton, N.J.—Second draft—Part V. Hannah Arendt Papers, Manuscript Division, Library of Congress, 1953k.
- Arendt/Blücher Hannah Arendt/Heinrich Blücher: Briefe 1925 bis 1975*, hrsg. von Köhler, L., Piper, 1996 (大島かおり、初見基『=: 1936-1968』, みすず書房, 2014年)
- 二次文献、ほか**
- Bernstein, Richard J. 1996 *Hannah Arendt and the Jewish question*, MIT Press
- Canovan, Margaret 1992 *Hannah Arendt: Reinterpretation of her Political Thought*, Cambridge University Press (寺島俊穂・伊藤洋典訳『アレント政治思想の再解釈』未来社, 2004年)
- Disch, Lisa J. 2011 “How could Hannah Arendt glorify the American revolution and revile the French? Placing *On Revolution* in the historiography of the French and American Revolutions”, *European Journal of Political Theory*, vol. 10(3)
- Honig, Bonnie 1991 “Declarations of Independence: Arendt and Derrida on the Problem of Founding a Republic”, *American Political Science Review*, vol. 85, no. 1
- King, Richard H. 2015 *Arendt and America*, The University Chicago Press
- Luxemburg, Rosa, translated by Wolfe, Bertram D. 1961 *The Russian Revolution and Leninism or Marxism?*, University of Michigan Press
- Weisman, Tama 2014 *Hannah Arendt and Karl Marx: On Totalitarianism and the Tradition of Western Political Thought*, Lexington Books
- Wolin, Sheldon S. 1983 “Hannah Arendt: Democracy and the Political”, *Salmagundi*, no. 60
- Young-Bruehl, Elisabeth 1982 *Hanna Arendt: For Love of the World*, Yale University Press (荒川磯男・原一子・本間直子・宮内寿子訳『ハンナ・アーレント伝』晶文社, 1999年)
- 伊藤洋典 2001: 『ハンナ・アーレントと国民国家の世紀』木鐸社
- 池田嘉郎責任編集 2017: 『ロシア革命とソ連の世紀 1 戦争から革命へ』岩波書店
- ヴィンクラー, ハインリヒ A. 2008: 『自由と統一への長い道: ドイツ近現代史 1: 1789-1933年』昭和堂、後藤俊明ほか訳 (原著 2000)
- 川崎修 2010: 『アレント論集』1・2、岩波書店
- 2014: 『ハンナ・アーレント』講談社学術文庫
- 川崎修・萩原能久・出岡直也編著 2017: 『アレントと20世紀の経験』岩波書店
- 衣笠哲生 1966: 「ロシア社会民主党の組織問題をめぐるレーニンとローザ・ルクセンブルク」『社会科学論集』第6号
- 工藤章男 1986: 「ローザ・ルクセンブルクの思想的・実践的位相 東方と西方のはざま」『文化学年報』第35号
- 田中陽児・倉持俊一・和田春樹編 1997: 『世界歴史大系 ロシア史 3』山川出版社
- 千葉眞 1996: 『アレントと現代: 自由の政治とその展望』岩波書店
- 寺島俊穂 1990: 『生と思想の政治学—ハンナ・アーレントの思想形成』芦書房

- 西川正雄 1960: 「ローザ・ルクセンブルクとドイツの政治」『史学雑誌』第69編2号
- 早尾貴紀 2008: 『ユダヤとイスラエルのあいだー民族／国民のアボリア』青土社
- 藤田省三 1995: 『全体主義の時代経験』みすず書房
- 森川輝一 2010: 『〈始まり〉のアーレントー「出生」の思想の誕生』岩波書店
- 矢野久美子 2014: 『ハンナ・アーレント 「戦争の世紀」を生きた政治哲学者』中央公論新社
- 矢野統敏編 1975: 『マルクス主義革命論争史 II 第二インターの革命論争』紀伊国屋書店
- 吉田傑俊・佐藤和夫・尾関周二編著 2003: 『アーレントとマルクス』大月書店
- ルクセンブルク, ローザ 『ローザ・ルクセンブルク選集』第1-4巻, 現代思想社, 1969-1970年 (原語については以下を参照した *Rosa Luxemburg: Ausgewählte Reden und Schriften, Band I und II*, Dietz Verlag, 1951)
- 1985: 『ロシア革命論』論創社、伊藤成彦・丸山圭一訳
- レーニン 「なにをなすべきか」, 『レーニン全集』第5巻, 大月書店, 1957年
- 『一歩前進、二歩後退』, 『レーニン二巻選集』第一巻第三分冊, 社会書房, 1952年

¹ 本論文で扱う「ロシア革命」とは主に、1917年の二つの革命（二月革命と十月革命）と、その間の過程、そしてその後のボリシェヴィキの政権掌握までを指す。

² 例えば、B・ホーニグはアメリカ独立宣言の解釈の仕方についてアーレントとデリダを対比させて論じ (Honig 1991)、L・ディッシュはアーレントのアメリカ革命論とフランス革命論を、両革命の歴史に引き直して考察した (Disch 2011)。また千葉眞はフランス革命についての卓越した理論家をマルクスとすれば、アメリカ革命はようやくアーレントにおいて理論化がな

されたとしている (千葉1996: p.123)。最近の著作では、アーレントのアメリカ、フランス両革命論について、アーレント研究を専門としない研究者による批判的な考察が行われている (川崎、荻原、出岡編2017)。

³ アーレントのスターリン体制論は、その内容が実証的に正しくないこと、ナチス全体主義の枠組みのあてはめであることが批判されてきた (例えばソ連史を専門とする塩川伸明は、具体的な点については挙げていないが以下のように述べている。「『全体主義の起原』の」スターリン体制に関わる個所は、素人芸としか言いようがない。」(亀甲括弧内、引用者。『民族浄化・人道介入、新しい冷戦』有志舎、2011年))。本稿では、アーレントの論述のそのような歴史的事実についての妥当性は問わない。本稿において試みるのは、彼女がいかに考えたのかを明らかにすることである。

⁴ アーレントの「マルクス研究」は第一草稿 (First draft) と第二草稿 (Second draft) に区別され、両者はLibrary of Congress のHPから常時閲覧可能となっている。

第一草稿は、1953 年、プリンストン大学での講義のために準備された “Karl Marx and the Tradition of Western Thought” である。第二草稿は、その1953 年のプリンストン大学での講義のテキストとして準備されたものである。第二草稿はいくつか変更が加えられ、第一草稿の基本的な内容は踏襲した改訂版であるといえる。

第一草稿は *Social Research* vol. 69, no. 2 (2002) において、第二草稿は *The Promise of Politics* (2005) においてそれぞれ編集され、出版されている。日本語では第一草稿、第二草稿ともに、佐藤和夫らによる草稿からの翻訳で2002 年に『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』として出版されている。

本節ではこの三つを刷り合わせつつ、可能な限りウェブ上の草稿を参照する。

⁵ 本論文の焦点は、あくまでもアーレントがマルクスをどう理解したかということにある。彼女

がヘーゲルやマルクスを正しく理解しているかどうか否かには立ち入らない。アーレントのヘーゲル、マルクス理解への批判的検討についてはWeisman 2014を参照。

⁶ その詳しい内容については森川2010の第4章を参照。

⁷ アーレントは革命の人々 (the men of revolutions) と職業革命家 (professional revolutionist) を区別している。前者は、フランス革命のロベスピエールやアメリカ革命のジェファソンなど、古代ローマ以来の伝統的な政治理解に依拠し、(少なくとも当初は) 公的自由を目指した人々を指す。後者は、フランス革命をきっかけにして現れてきた、革命を対象とした研究と思索を行う人々のことである。職業的革命家は革命を「起こす」ことはできないが、レーニンのように、革命勃発後、権力につくことを役割とする (OR: p. 115, 257)。

⁸ 本章第1節でみたように、『全体主義の起原』では、「客観的な敵」に対するテロルは、独裁ではなく全体主義に特有のものとして論じられていた。しかし『革命について』では、レーニン独裁を論じる文脈でこの言葉が使用されている。これがアーレントの定義の曖昧さによるものなのか、彼女の意図的な論述なのかはわからない。

⁹ 『マルクス主義革命論争史 II 第二インターの革命論争』145-150頁

¹⁰ ここではゼネラル・ストライキと大衆ストライキは、ほぼ同義として用いられている。

¹¹ 『マルクス主義革命論争史 II 第二インターの革命論争』140-144頁

¹² 『ローザ・ルクセンブルク選集2』174-176頁

¹³ 『ローザ・ルクセンブルク選集2』210-213頁

¹⁴ 『ローザ・ルクセンブルク選集2』213-215頁

¹⁵ 『ローザ・ルクセンブルク選集2』215-217頁

¹⁶ 『ローザ・ルクセンブルク選集2』217-221頁

¹⁷ 『ローザ・ルクセンブルク選集2』247頁

¹⁸ 『レーニン 二巻選集 第一巻3』86-98頁

¹⁹ 『レーニン 二巻選集 第一巻3』197-315頁

²⁰ 『ローザ・ルクセンブルク選集1』249-250頁

²¹ ブランキストとは、フランスの革命家、社会主義者であったブランキに由来する、少数精鋭部隊の蜂起による革命方式を行う人々を指す。

²² 『ローザ・ルクセンブルク選集1』252-254頁

²³ 『ローザ・ルクセンブルク選集1』258-259頁

²⁴ 『ローザ・ルクセンブルク選集1』260頁

²⁵ 『ローザ・ルクセンブルク選集1』261-262頁

²⁶ 『ローザ・ルクセンブルク選集1』268頁

²⁷ 『ローザ・ルクセンブルク選集1』269頁

²⁸ 『ロシア革命論』98-99頁

²⁹ 『ロシア革命論』102-106頁

³⁰ 『ロシア革命論』107-111頁

³¹ 『ロシア革命論』4-6頁

³² 『ロシア革命論』31-35頁

³³ 『ロシア革命論』39-40頁

³⁴ 『ロシア革命論』41-42頁

³⁵ 『ロシア革命論』45-46頁

³⁶ 『ロシア革命論』46-49頁

³⁷ 『アーレント＝ブリュッヒャー往復書簡』の中には、それを明確に示すような記述を筆者は確認できなかった。

³⁸ これについては川崎2010bの第3章を参照。

³⁹ これは1918年11月18日の「革命のはじまり」や、12月17日の「国民議会か評議会政府か」などにみられる (『ローザ・ルクセンブルク選集第4巻』)。

⁴⁰ ここにはアーレントとルクセンブルクの、民主主義に対する態度の特色があらわれている。ルクセンブルクは、レーニンやトロツキーの独裁理論を批判して、(社会主義的) 民主主義をプロレタリアートの独裁と同義として捉えるという独特の理解をしていた (『ロシア革命論』)。アーレントは評議会制と政党制の闘争、そして評議会制が政党制によって破壊されていく様子を否定的に論じた (OR)。アーレントにおいて、選挙や政党などの民主主義と彼女が肯定する政治形態は、緊張感、対立関係をはらんでいるのである。

またアーレントの政党制への評価の変遷も興

味深い。彼女は『全体主義の起原』において、多党制は一党独裁を生み出す傾向があるものとして批判し、アメリカやイギリスの二党制を、そうした問題を回避し得るものとして論じた。しかし『革命について』では、あらゆる形態の政党制に対して批判がなされている。こうした変化について、本論文では立ち入って論じることができなかった。

⁴¹ 1958年のハンガリー革命論と1963年『革命について』の間には、フルシチョフ体制への理解について変化がみられる。ハンガリー革命論においては、フルシチョフ体制がスターリン全体主義の継承者として論じられている。それに対して『革命について』では「フルシチョフによる啓蒙専制主義」と表現され、「スターリンの全体主義」と区別されている。これは同時代の展開に伴って、アーレントがフルシチョフ体制への理解を変えていったことのあらわれであろう。

そうした変化をよりはっきりとうかがえる証拠がある。ハンガリー革命論は1958年に出版された『全体主義の起原』英語版第二版に入れられていた。しかし1968年版など、後の版ではハンガリー革命論が姿を消している。この理由をアーレントは1968年版の『全体主義の起原』の序文において、世界情勢の変遷に伴い「ハンガリー革命論」で論じたことが時代に合わなくなった、古くなったからであると述べている。

(あらき りゅうた 北海道大学大学院法学研究科修士課程修了)